

経済と経営 25-4 (1995. 3)

〈論文〉

『価値形成基体』と『労働時間』IV. 11) —— 14)

—— A. スミスにおける「商品となって現われる労働の二重刻印」——

鈴木 秀 勇

11) スミスは、a) WoN・「第一編」・「第五章」・「第1パラグラフ」にあって、こう論述している。

「[1.] 人それぞれは、人間にふさわしい生活を送るための必需物、便宜物、および、生活を快適ならしめる物を、自分の力によって楽しく味わうことができる・その度合に応じて、あるいは、富んでいるのであり、あるいは、貧しいのである。[2.][a.] ところが、[社会的] 分業が、いったん、行きわたってしまってから、総じて人の・自分自身の労働が当人に自給させることができるのは、上記の物の・ごく僅かな部分にすぎない。[b.] 総じて人は、上記の物の・大部分を、多数にのぼる・ほかの人々の労働から、導き出すほかは、なく、[3.] したがって、総じて人は、上記の[・多数にのぼる・ほかの人々の] 労働の量のうち、自分が支配することができる量に応じて、すなわち、自分の力によって獲得することができる量に応じて、あるいは、富んでおり、あるいは、貧しい、ということになるほかは、ない。[4.][a.] それゆえ、どのような商品であれ、商品が、その商品を所持している当人にとって持っている[交換] 価値[の・大きさ]、ただし、その当人は、当の商品を使用したり、ないしは、消費したり、するつもりではなく、当該の商品を、ほかの商品と交換するつもりなのであるが、こうした当人にとっ

て当該の商品がもっている [交換] 価値 [の・大きさ] は, [b.] 上記の [・多数にのぼる・ほかの人々の] 労働の量のうち, 当該の商品がその当人に, 獲得することを得さしめ, あるいは, 支配することを得さしめる量に, 等しいのである。[5.] それゆえ, 労働 [の量] が, 一切の商品の交換価値 [の・大きさ] を測る・真実の尺度である」⁵¹⁾。([1.], 等と, 括弧内・補完とは, 引用者による)

ア) 見られるとおり, 上掲の論述中, [1.] は,

i) <物質上> の「富」の内容と,

ii) <社会的分業> の普遍化 <以前> における・<状態> としての「富」(および, 「貧」) との規定を, 語るものである。

イ) ついで, これをうけ, スミスは, [2.] [b.] にあって, i). <社会的分業> の普遍化 <以後> について, 「総じて人は」, <物質上> の「富」の「大部分」を, (プラトーンの見解と表現とひとしく) 「多数にのぼる・ほかの人々の労働から」, 「導き出す」—— とするのであるが,

ii) しかし, α) 「導き出す」のは, 《いかにして》であるのか, について

51) WoN., Vol. 1 p. 47

[1.] EVERY man is rich or poor according to the degree in which he can afford to enjoy the necessities, conveniencies, and amusements of human life. [2.] [a.] But after the division of labour has once thoroughly taken place, it is but a very small part of these with which a man's own labour can supply him. [b.] The far greater part of them he must derive from the labour of other people, [3.] and he must be rich or poor according to the quantity of that labour which he can command, or which he can afford to purchase. [4.] [a.] The value of any commodity, therefore, to the person who possesses it, and who means not to use or consume it himself, but to exchange it for other commodities, [b.] is equal to the quantity of labour which it enables him to purchase or command. [5.] Labour, therefore, is the real measure of the exchangeable value of all commodities.

は、

β) 《語られるべく》して、《なんら、語られるところが、ない》。

b) ア) つぎに。 i) この——「物…を」「多数にのぼる・ほかの人々の労働から」, 「導き出す」——という言表が、

ii) [3.] に至って、——「上記の[・多数にのぼる・ほかの人々の] 労働の量のうち、自分が支配することができる量に応じて、すなわち、自分の力によって獲得することができる量に応じて」「富んでおり、あるいは、…」, ——という立論に〈展開〉するのであるが、

iii) この〈展開〉は、本稿・次・12), 以下に見るとおり, α) 「商品」が有する「交換価値」の「大きさ」を、〈規定〉するさいの、

スミスの〈論理〉を形づくるものとなる。

イ) とはいえ、 i) 前掲・[3.]の論述にあっては、〈いまだ〉、スミスは、

ii) α) 「多数にのぼる・ほかの人々の労働の量のうち」,

β) 「自分が支配することができる量」, すなわち、「自分の力によって獲得することができる量」の〈大・小〉が、

γ) 〈状態〉としての「富」と「貧」とである、と規定するに《すぎない》のであり、

iii) 換言すれば、α) 「多数にのぼる・ほかの人々の労働の量のうち」, 「富」(ないし、「貧」)と規定される「量」を、「自分が支配する」のは、《いかにして》であるのか、

β) 「自分の力によって獲得する」と言われる時の・その「自分の力によって」とは、《いかなる》「力」ことであるのか、については、

v) これまた、《なにら、語るところが、ない》のである。——

vi) しかし、もとより、これが〈語られる〉のでなくては、α) 「商品」のもつ「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉する〈論理〉は、《得られず》,

β) それゆえ、その〈規定〉は、《不可能》である。

ウ) 同ようにして、次・[4.] にあってもまた、

i) α) ——[a.]「商品」が(当該「商品」の所持者にたいして有する)「交換価値」の「大きさ」は、

β) [b.]「上記の[・多数にのぼる・ほかの人々の]労働の量のうち」,「当該の商品が」所持者に「獲得することを得さしめ、あるいは、支配することを得さしめる量に、等しい」、とする立論は、

γ) 「第五章」・次・「第2パラグラフ」における・「商品」が有する「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉と《同一》であるにしても、

ii) しかし、 α) 「当該の商品」が、その「量」の「[多数にのぼる・ほかの人々の]労働」を、当の「商品」所持者に、「獲得」/「支配」「することを得さしめる」のは、

β) 〈いかにして〉であるのか、が《語られていない》以上、

iii) なお、 α) 上記の〈規定〉の〈論理〉は、《得られては、いない》のであり、

β) したがって、上の立論も、いまだ、上記の〈規定〉たるには、《至って、いない》、としなければならず、

エ) また、それゆえ、i) 前掲・[4.]の立論からの〈帰結〉、すなわち、「[5.]それゆえ、労働[の量]が、一切の商品の交換価値[の・大きさ]を測る・真実の尺度である」、とする規定にしても、

ii) なお、《論理上》の〈根拠〉を伴っているものでは、《ない》のである。

c) そして、付言すれば。ア) i) 前掲中の・[4.] [a.]—[b.]が、

α) これまでに論述された・〈状態〉としての「富」を、「商品」に〈代置〉することによって、

β) 「商品」の「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉を示そうとするものであることは、

ii) [4.] [a.]の末尾から、[4.] [b.]の冒頭にかけての叙述に、明らかであるが、

iii) しかし、〈状態〉としての「富」が有する「交換価値」の「大きさ」の

〈規定〉と、「商品」が有する・その〈規定〉とが、〈同一〉であることの〈論述〉、

iv) とりもなおさず、「富」の概念と、「商品」の概念の・各々の規定もまた、《欠落》しているのである。

イ) 加えて、[5.]の論述には、さらに〈難点〉が、ある。

i) まず。あらゆる種類の「尺度」(「度」, 「量」, 「衡」)は、それ自体において、〈なにらか〉の「量」をもたざるをえないのであるから、

ii) スミスとしては、α)「労働が、…測る尺度である」、とするのでは、なく、

β) (引用者による補完のように,)「労働の量が、…」、とすべきであった。

ウ) つぎに。i)「労働の量」(「労働」の「支出」の「量」)そのものを「測る」「尺度」は、プラトーンが示し、かつ、スミスものちに言及する⁵²⁾ことになる・「労働」の「支出」の「継続時間」以外には、存在しない。

ii) それゆえ、スミスは、——「一切の商品」の「交換価値[の・大きさ]を測る・現実の尺度」は、「支出」の「継続時間」によって「測られる」・「労働の量」である、——と言うべきであった。

iii) だが、さらに。α)「継続時間」は、《等質》であるから、

β)《等質》の「継続時間」によって「測られる」「労働」とは、《等質》の「労働」でなくては、ならない。

iv) しかし、スミスは、この「第1パラグラフ」では、いまだ、《等質》の「労働」とは、〈いかなる〉「労働」であるのかを、《示しては、いない》のである^{52-a)}。

12) さて、スミスについて、「商品」の「交換価値」の「大きさ」が〈規定〉されるさいの〈論理〉を求めるために、ついで〈分析〉されるのは、WoN・

52) 本・脚注は、長文にわたるため、本稿・本文の末尾に、記した。

52・a) この点については、cf. 本稿・次・12), e), および, f), エ)

「第一編」・「第五章」・「第 2」および「第 7」パラグラフの論述である。

a) しかし、その〈分析〉に先立って、以下の事柄を見ておくことが、必要である。

ア) 既に「第 1 パラグラフ」の叙述に現われていたとおり、スミスは、「商品」の「交換価値 [の・大きさ]」を、 i) 'value' なる「イングランド語」で表示し、

ii) また、「第五章」の「章題」に記されているように、'price' という「イングランド語」によっても、言表している。

イ) 「イングランド語」・'value' は、

i) 「中世ラテン語」の 'vālor' ([ヴァロオル]) に、由来し、さらに、この 'vālor' なる「名詞」は、「古典ラテン語」の「動詞」・'valēre' ([ヴァレエーエレ]) に、発する。

ii) 'valēre' は、IE [「印欧語族基語」] の (ローマ文字で表記すれば) 'wal-' ('強力である'。「内陸ゲルマン語」中「古高地ドイツ語」の「動詞」・'walten'；「西スラヴ語」に属する「新チェヒ語」の「動詞」・'vládnouti' ([ヴラードヌウティ])；「東スラヴ語」の一つ・「ルूसィ語」の「動詞」・'владѣть' ([ヴラディエーティ]) は、いずれも、上記・'wal-' に発し、「支配する」の意) を源とするものであって、それゆえ、原意は、「力を有する」であり、

iii) また、したがって、「～を支配する」の語意をもった。

iv) α) 後出のとおり、スミスが、〈ある〉「量」の「商品」が有する「交換価値 [の・大きさ]」 (the exchangeable value) を、その〈ある〉「量」の「商品」が、〈ある〉「量」の「労働」ないし「労働生産物」を「獲得／支配する力」と〈規定〉するのは、

β) 「詩」, 「文学」や「修辞学」など、「言語」芸術, 「言語」技法に研鑽を積んでいたスミスが、「イングランド語」・'value' の・上記の原意を、強く念頭においていたことにも拠る、と見うるであろう。

v) ところで、'valēre' という「動詞」は、上掲から転じて、α) 「～に拮

抗しうる」, 「～に対抗しうる」という語義をもち,

β) それゆえ, ほとんど, 「～に値する」の意を有するに至ったのである。

γ) この間の消息を告げているのは, ウァッルロォ (Mārcus Terēntius Vārro [マァーアルクウス・テェレエンツィウス・ウァッルロォ], ? 116 B. C. – ? 27 B. C.) の・高名な述作・『ラテン語について』(“Dē Līnguā Latīnā.” ([デュー・リィングウアー・ラァティーナァー]) (全・十編) の「第五編」・「第百七十三節」——「第百七十四節」の・下掲の文章に用いられている・‘valêre’の語義である。

「第百七十三節。鑄貨は, それが銀を素材とする場合, númmī ([ヌウムミィー]. pl.: sg. ‘númmus’ ([ヌウムムゥス])⁵³⁾ と呼ばれる。この名称は,

53) この「古典ラテン語」・‘númmus’, ‘númmī’について付言すれば。

前世紀・ドイツの・傑出した古典古代学者・ボォェーク (August Böckh) は, 『古代の重量諸単位・鑄貨品位・尺度にかんする・度量衡学上の諸探究。上記・各項間の連関における』(„Metrologische Untersuchungen über Gewichte, Münzfüsse und Masse des Alterthums in ihrem Zusammenhange.“ Berlin, 1838. Verlag von Veigt und Comp. Abschnitt: I. – XXX. v – xxviii; 3–474 S. Register: 475–481 S. 一橋大学『社会科学古典文献センタ』所蔵。Die Bibliothek des Prof. Carl Menger. 分類番号・Ges. 37) の第 XXI 節。スイクウリィー族の Nummos と, タァレントウム／タァラァントォ (Tārentum/Taranto. イタリア南端。古代の・富裕・強大な商業都市) 人およびヘェーラァークレェア (Hērāclēa. ギリシャ本土の・タァラァントォ人の植民・港湾都市) 人の Nummos」(S. 310–317) で, 論述の大半を, スイクウリィー族の ‘númmos’ にあて, 古代の諸記録に依拠して, 「古典ラテン語」・‘númmus’ は, 「古代ギリシャ語」・‘νόμος’ ([ノォモォス]。 「取分」／「持分」; 「慣行」; 「法」) に発する ‘νοῦμμος’ ([ヌウムモォス]。ボォェークは, ‘-οῦ-’ ([–ウーウ–]) を, 「短音」([–ウ–]) としている。これのラテン語・音綴が, ‘númmos’ ([ヌウムモォス]) である) を源とし (「古代ギリシャ語」の・男性名詞・語尾・‘-ος’ が, 「古典ラテン語」の・男性名詞・語尾・‘-us’ となる), ‘νόμος’ に発する点においては, ‘númmus’ も, (例えばプラトォーンも用いている) 「古代ギリシャ語」・‘νομισμα’ ([ノォミィスマァ]。 「鑄貨」) と, ひとしい, と述べている。op. cit. S. 310

スイクウリー族の間から、生まれた。デェーナァーリィイー (dēnārii. pl. ; sg. 'dēnārius' ([デェーナァーリユウス])) という名称は、これが、青銅貨 (āes [アエス])・十枚 (dēni [デェーニィー]) に、拮抗した [／値した] (vālebant [ウァレェバァント]) ことにより、クウィーナァーリィイー (quīnārii pl. ; sg. 'quīnārius' ([クウィーナァーリユウス])) なる名称は、それが、青銅貨・五枚 (quīni [クウィーニィー]) に、拮抗した [／値した] ことによるものである。…

第百七十四節。銀貨・一・デェーナァーリユウスの・十分の一 (dēcuma [デェクウマァ]。／'dēcima' ([デェキィマァ])) が、リィーベェッルラァ (lībella) と呼ばれるのは、一・デェーナァーリユウスの・十分の一が、重量の上では、リィーイブラァ (lībra)⁵⁴⁾ に、拮抗した (vālebat [ウァレェバァト]) からであるが、しかし、銀の含有量は、リィーイブラァには達しなかったのである。…」⁵⁵⁾。

vi) 「中世ラテン語」の「名詞」・'vālor' が、「対価」、「代価」、「代償」；および、それらを「要求するもの」という意味での「価値」を、表示したのは、

53・a) Sīculi ([スイクウリー]) は、ガァッルリィア (Gāllia. 現在の全フランス、ベルギー、ネーデルラントの一部、スイスの一部) から流出し、イタァーリィア西岸に沿って居住した後、シチィーリィアに移住した・ケルト部族・Sicāni ([スイカァーニィー]) の一分枝であり、早くからイタァーリィアに流入、テェーヴェレェ河からイタァーリィア東岸に定着したが、やがてシチィーリィアに移った。

54) 'lībra' は、「初期イタァーリィア語」・'līthrā' ([リィートラァー]。これから、「古代ギリシャ語」・'λίτρα' ([リィトラァ]。「シチィーリィアの銀貨」。「lībra」と同義。また、重量単位として、「12 オンス (1 パァウンド)」が生まれた) に発し、「古典ラテン語」としては、「秤」；(「秤られたもの」の意で)「ローマ・パァウンド (= 327, 45 g)」, および、「水準器」の語意を、もった。

55) Mārcus Terēntius Vārro : "Dē Līnguā Latīnā." V., 173 ; 174. The Loeb Classical Library. Vol. I. Cambridge (Mass.), Harvard U-P., Lond., William Heinemann, 1951. p. 162

上掲の・「支配する」から「値する」への・語意の推移に基づく、と考えられる。

vii) 語義の・このような推移は、‘v́alor’に相当する・「ギリシャ語」の「名詞」・‘ἀξία’ ([アクスィアー]) が、(廃語となった)「形容詞」・‘ἀγτιος’ ([アクティオス]) に由来し、さらに、この‘ἀγτιος’は、「動詞」・‘ἀγειν’ ([アゲイン]) の諸語義のうちの・「秤にかける」に発して、「秤にかけて釣り合うところの」の意をもち、それゆえ、「名詞」・‘ἀξία’は、「拮抗」の語義を有し、また、(「所有格」(「第二格」) 形で現われる・他の・しかるべき「名詞」の表示内容にたいする)「対抗」の意から、その表示内容の「対価」・「代償」、代価；それらを「要求するもの」としての「価値」、という語義を有するに至ったのに、ひとしい、と言いうる。

ウ) つぎに、スミスが‘value’の語と並んで用いている‘price’という「イングリッシュ語」は、

i) 「古典ラテン語」の‘prétium’ ([プレツィウム])。代償、対価、代価；これらを「要求するもの」としての「価値」に、由来する。

ii) なぜなら。この語・‘prétium’もまた、IEの「前置詞」・(ローマ文字で表記して)‘preti’ (Skt. ([サームスクルウタァ]) の‘proti’；「西スラヴ語」の一つ・「新チェヒ語」の「前置詞」・‘proti’ ([プロォティ])；「東スラヴ語」に属する「ルूसィ語」の「前置詞」・‘протів’。([プロォティフ])。語意は、いずれも、「～に拮抗して」、「～に対抗して」)に発して、上掲の語意を有したからである。

エ) そして、スミスが、i) ‘value’および‘price’の語を使用するのは、

ii) とくに、「代償」、「代価」、「代価」いう概念を表示するためであって、

iii) ‘value’について、その証左を挙げれば。後に見るとおり、「第五編」・「第2パラグラフ」で、スミスは、〈二種類〉の「労働」・「労苦と煩勞」について、語っているが、

iv) そこから〈分析〉されるのは、――

α) 一方で、 $\dot{\cdot}$ になにらか $\dot{\cdot}$ の「量」の $\dot{\cdot}$ ある $\dot{\cdot}$ 「商品」の「使用価値」を「生産」するための『代償』として、当該「商品」の $\dot{\cdot}$ 生産者 $\dot{\cdot}$ により、

β) 「支出」の《態様》を有する（「質の面で相異なる」）「労苦と煩勞」が、「継続時間」を以って「支出」され、

γ) しかし、かかる「労苦と煩勞」と《不可分離》に、 $\dot{\cdot}$ いま一つの種類 $\dot{\cdot}$ の $\dot{\cdot}$ すなわち、——「支出」において《無態様》であり $\dot{\cdot}$ しかし、上記の「継続時間」によって「測られる」以外にない $\dot{\cdot}$ 《等質》の——「労苦と煩勞」の「量」が「支出」されるのであり、

δ) 他方で、 $\dot{\cdot}$ 他 $\dot{\cdot}$ の $\dot{\cdot}$ 生産者 $\dot{\cdot}$ は、上記の「量」に「等しい」 $\dot{\cdot}$ 量 $\dot{\cdot}$ の $\dot{\cdot}$ 《無態様》の「労苦と煩勞」を、「交換」における『代償』として「支出」し、すなわち、その「労苦と煩勞」を上記の $\dot{\cdot}$ 生産者 $\dot{\cdot}$ に「獲得」せしめることによって、

ε) 上記の $\dot{\cdot}$ になにらか $\dot{\cdot}$ の「量」の $\dot{\cdot}$ ある $\dot{\cdot}$ 「商品」を「獲得」する、——という $\dot{\cdot}$ 「商品」の有する「交換価値」の「大きさ」(value)を $\dot{\cdot}$ 規定 $\dot{\cdot}$ する $\dot{\cdot}$ 論理 $\dot{\cdot}$ であり、

vi) そして、その $\dot{\cdot}$ 論理 $\dot{\cdot}$ の核心をなすのは、

α) 上記のとおり、「商品」の $\dot{\cdot}$ 生産 $\dot{\cdot}$ において「支出」される『代償』(value)としての「労苦と煩勞」と、

β) 「商品」の「交換」において「支出」される『代償』(value)としての「労苦と煩勞」との両概念であるからである。——

b) さて、そこで、下掲の $\dot{\cdot}$ 「第2パラグラフ」の論述を、逐次、 $\dot{\cdot}$ 分析 $\dot{\cdot}$ するところへ、進もう。

「[1.] ひとつひとつの物 [商品] の $\dot{\cdot}$ 現実の代償、すなわち、ひとつひとつの物が、それを確保する必要に迫られている人に、現実に支出させるものは、その物を確保する労苦と煩勞と [の量] である。 [2.] ひとつひとつの物 [商品] が、それを確保してはいるが $\dot{\cdot}$ しかし、それを処分する必要に迫られている人、すなわち、それを、なにか $\dot{\cdot}$ ほかの物 [商品] と交換する

必要に迫られている人にとって、現実にもつ値打ち[「交換価値[の・大きさ]」]は、[3.][a.] 当の物[商品]が、当該の人にとり、[他人に] 肩代りさせることができる・労苦と煩勞と[の量]であり、[b.] すなわち、当の物[商品]が[、それを、交換によって確保する必要に迫られている・] ほかの・多数にのぼる人々に、負担させることができる・労苦と煩勞と[の量]である。[4.][a.][私たちが所持している・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨を以って購買される物[商品][の・ある量]とは、[実は、][私たちの] 労働[の・ある量]によって獲得されるものなのであり、[b.] その労働の量は、私たちが、同じ・その物[商品]を、私たち自身の労苦によって[生産して] 確保する場合の・その労苦の量に、等しいのである。[c.][そして、] 物[商品]を購買する場合の・こうした[・私たちが所持している・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨は、実を言えば、私たちにとり、今言った[・その物[商品]を生産／確保する場合の・私たちの] 労苦[の量]を、[他人に] 肩代りさせてくれるものなのである。[5.][a.][すなわち、] そのような[・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨は、ある量の労働にたいする支配力を含んでいるのであって、[b.] 私たちは、そうした・ある量の労働にたいする支配力を含んでいる[・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨を、その時に、それと等量[の労働]にたいする支配力を含んでいる、と考えられる[・ある量の] 物[商品]と、交換するのである。[b.] 労働[の量]が、一切の物[商品]の代価として支払われる・根源にある代償であつたし、根本となる獲得鑄貨であつた。地上にある・あらゆる富[商品]が、根本にあつて獲得されたのは、^(きん)金によるのではなく、ないしは、銀によるのではなくて、労働[の量]によるのであつた。[7.][すなわち、] 富[商品]を所持し・しかも、その富[商品]を、なにらかの・新たな生産物と交換する必要に迫られている人々にとって、その富[商品]がもつ[交換] 価値[の・大きさ]は、当の富[商品]が、そうした人々に、獲得することを得さしめることができる・[ほかの人々の・] 労働の量と、精確に、等しいのである」⁵⁶⁾。(括弧

内・補完は、引用者による)

ア) まず。 i) 上掲の [1.] にあって、「ひとつひとつの物 [商品]」を「確保する必要に迫られている人」と言われる場合の・「確保」する「必要」に「迫られている」とは、〈二義〉であり、すなわち、

ii) 一つには、 α) 「生産」において、を、

β) 二つには、 β) 「交換」において、を、

意味するものである。

イ) —— 詳言すれば ——, 「ひとつひとつの物」を, 「商品」たるべき「労働生産物」としての —— 前掲の例にしたがい —— 〈ある〉「量」の「食糧」とすれば、

i) 一つには、 α) 「農耕夫」が、〈社会的分業〉の中で、自己と、他のすべての〈生産者〉とのために、

56) WoN., Vol. 1 pp. 47—48

[1.] The real price of every thing, what every thing really costs to the man who wants to acquire it, is the toil and trouble of acquiring it. [2.] What every thing is really worth to the man who has acquired it, and who wants to dispose of it or exchange it for something else, [3.] [a.] is the toil and trouble which it can save to himself, [b.] and which it can impose upon other people. [4.] [a.] What is bought with money or with goods is purchased by labour [b.] as much as what we acquire by the toil of our own body. [c.] That money or those goods indeed save us this toil. [5.] [a.] They contain the value of a certain quantity of labour [b.] which we exchange for what is supposed at the time to contain the value of an equal quantity. [6.] Labour was the first price, the original purchase-money that was paid for all things. [7.] It was not by gold or by silver, but by labour, that all the wealth of the world was originally purchased ; [8.] and its value, to those who possess it and who want to exchange it for some new productions, is precisely equal to the quantity of labour which it can enable them to purchase or command.

β) 例えば、12,000 kg の「量」の「食糧」の「使用価値」を、「生産」によって「確保」する「必要」に「迫られている」ことを、意味し、

ii) 二つには、α) 「家屋建築職人」が、自分は、ただ、「家屋」(の・4 戸の「量」) の「使用価値」のみを「生産」するにすぎぬところから、

β) 己れが「必要」とする・3,000 kg の「量」の「食糧」については、「必要」が《不充足》であり、

γ) したがって、例えば、1 戸の「家屋」と「交換」に、——すなわち、「家屋」・1 戸 (b¹) を『代償』とすることによって、ないしは、b¹ を「農耕夫」に「分かち与える」ことによって——

δ) 3,000 kg の「量」の「食糧」(a¹) を、「農耕夫」から、「分かち取る」——「獲得」「確保」する——「必要」に「迫られている」ことを、意味するものである。

ウ) つぎに。i) スミスの言を俟たずとも、「ひとつひとつの物 [商品] が、それを確保する必要に迫られている人に、現実に出させる (really costs to) もの」が、「ひとつひとつの物の [商品] ・現実の代償 (the real price)」であることは、当然であるけれども、

ii) しかし、スミスが、その「代償」について、それは、「その物 [商品] を確保する労苦と煩勞と [の量] である」、と規定する時、

iii) 「確保する労苦と煩勞」もまた、——上記・イ) の〈二義〉からの〈帰結〉として——、もとより、〈二義〉である、ということである。

エ) すなわち、「確保する労苦と煩勞」とは、i) 一つには、(「商品」たるべき)「労働生産物」の「使用価値」を「生産」するための『代償』として——当該「商品」の「生産」が、その〈生産者〉に「現実に出させる」——「労苦と煩勞」を、意味している。

α) なぜなら。もし、「食糧」,「家屋」,等の「商品」が有する「使用価値」を「生産」するために、(「農耕夫・労働」,「家屋建築職人・労働」等々の「質の面で相異なる」)「労苦と煩勞」という『代償』が「支出」されないとする

ならば、——すなわち、いかに「労働」が、 K^1 , K^2 の言うように、「人間トシテモツ・脳髓の力、筋肉の力、神経の力、手の力、その他の力の・生産にあたっての支出」であれ、——その「支出」が、〈自由な遊び〉であるならば、

β) かかる「労働」は、人間の生活の「必要」を〈原動力〉とするものではなく、のにたいし、

ii) 「使用価値」の「生産」は、ことごとく、生活の「必要」(たとえ、〈自由な遊び〉という「必要」であるにしても)を〈原動力〉とするものであり、

iii) したがって、上記・i), α) の場合には、「使用価値」は、ついに、「生産」されずに畢るからである。

オ) ついで。i) 「確保する労苦と煩勞」とは、二つには、α) 前出・エ), i) に、その一つの意味として記した「労苦と煩勞」——再言すれば、「商品」の「使用価値」を「生産」するための『代償』として、「現実に支出」される「労苦と煩勞」——に

β) 「等しい」「量」の「労苦と煩勞」を、意味するものである。

c) なぜなら。ア) i) α) まず。「労苦と煩勞」としての「労働」という『代償』の「支出」によって「使用価値」を有するに至った「労働生産物」は、——それが、〈社会的分業〉の方法による「労働生産物」である以上——、《必然に》「交換」され(「商品」となり)、「商品」として、〈なにかの〉「大きさ」の「交換価値」を、身にまといざるをえないのであるが、

β) このように、「交換」されることが、《必然》であるとは、もとより、例えば、a 「量」の「食糧」(「農耕夫」の「労働生産物」と、b 「量」の「家屋」(「家屋建築職人」の「労働生産物」とが、「交換」されることが、《必然》であることであり、

γ) とりもなおさず、a 「量」の「食糧」が、「農耕夫」に、《必然に》、b 「量」の「家屋」を「分かち取」らしめることであり、また、b 「量」の「家屋」が、《必然に》、「家屋建築職人」に、a 「量」の「食糧」を「分かち取」らしめることであるに、ほかならない。

ii) しかるに、《必然に》、「分かち取」らしめるとは、《獲得》せしめることとであり、《支配》せしめることに、ほかならず、ないしは、《獲得》／《支配》せしめる「力」をもっていること以外のものでは、ないのである。

iii) それゆえ、上記・i), β) のとおり、「交換」が《必然》であるとは、a「量」の「食糧」が、「農耕夫」に、b「量」の「家屋」を、《獲得》／《支配》せしめることであり、また、b「量」の「家屋」が、「家屋建築職人」に、a「量」の「食糧」を、《獲得》／《支配》させる「力」を有していることである。

d) がしかし、ア) 上記・b), オ), iii) を以って、—— a「量」の「食糧」が身にまとう「交換価値」の「大きさ」が、b「量」の「家屋」であり、逆に、b「量」の「家屋」の有する「交換価値」の「大きさ」が、a「量」の「食糧」である——、とすることは、《できない》。

イ) なぜなら。言うまでもなく、i) 上記・b), オ), iii) は、〈いまだ〉、——「食糧」の「使用価値」と「家屋」の「使用価値」とが、いずれも、「量」をくもたぬものであり、「質の面で相異なる」ものを出不い以上——、「交換価値」の「大きさ」(すなわち、《等質》なるものの「量」) の〈規定〉を、

ii) 語るものでは、〈ない〉からである。

e) その〈規定〉を得るためには、以下の〈問い〉に〈答える〉ことが、〈不可欠〉であるのは、もとよりである。すなわち、

〈なにゆえに〉、a「量」の「食糧」が、「農耕夫」に、—— b「量」〈以上〉でもなければ、〈以下〉でもなく、—— まさに b「量」の「家屋」を、《獲得》／《支配》せしめる「力」を有するのであるか、

また、同じく、b「量」の「家屋」が、「家屋建築職人」に、—— a「量」〈以上〉でもなく、—— ほかならぬ a「量」の「食糧」を、《獲得》／《支配》させる「力」をもっているのであるか、——〈問い〉は、これである。

ア) まず。i) 「農耕夫」は、a「量」の「食糧」を「生産」するにあたって、(ある「継続時間」を以って「測られた」) a¹「量」の「労苦と煩勞」を、

「支出」したのであり、

ii) α) 「支出」したとは、

β) a^1 「量」の「労苦と煩勞」が、 a 「量」の「食糧」の「使用価値」を「生産」するための『代償』であったことである。

iii) 同じようにして、 α) b 「量」の「家屋」の「使用価値」を「生産」するための『代償』は、

β) 「家屋建築職人」が「支出」した・ b^1 「量」の「労苦と煩勞」である。

イ) ところで、i) a 「量」の「食糧」が、 b 「量」の「家屋」と「交換」され、すなわち、

β) 「農耕夫」に、

γ) b 「量」の「家屋」を、《獲得》／《支配》せしめるとは、

ii) 「農耕夫」が、〈自らは〉 b^1 「量」の「労苦と煩勞」という『代償』を「支出」〈しなかった〉にも拘らず、

iii) α) a 「量」の「食糧」の——ないし、 a 「量」の「食糧」の「使用価値」の——「生産」のために「農耕夫」が「支出」した・ a^1 「量」の「労苦と煩勞」が、

β) 「農耕夫」に、

γ) 「家屋建築職人」が b 「量」の「家屋」の「使用価値」の「生産」のために「支出」した・ b^1 「量」の「労苦と煩勞」を、

δ) 《獲得》・《支配》せしめることに、ほかならない。

ウ) また、同じく。i) α) a 「量」の「食糧」が、

β) 「農耕夫」に、

γ) 「家屋建築職人」が b^1 「量」の「労苦と煩勞」を「支出」した・ b 「量」の「家屋」を、《獲得》／《支配》せしめるとは、

ii) α) a 「量」の「食糧」が、

β) 「農耕夫」にとり、

γ) 〈社会的分業〉ならざる・「自給自足」の生産方法による場合には、 b

「量」の「家屋」を「生産」するための「代償」として、「農耕夫」自らが《負担》するほかなかった・ b^1 「量」の「労苦と煩勞」を、

δ) 「家屋建築職人」に、《肩代り》させ・《負担》させ・——《転化》させ——ているにこと以外の・なにものでも、ないのである。

エ) もとより、上記・イ)ーウ) は、 b 「量」の「家屋」と、 b^1 「量」の「労苦と煩勞」，「家屋建築職人」とについても、そのまま妥当する事柄である。

オ) こうして、 i) α) a 「量」の「食糧」が、「農耕夫」に、「家屋建築職人」の・ b^1 「量」の「労苦と煩勞」を、《獲得》／《支配》せしめ、

β) 逆に、 b 「量」の「家屋」が、「家屋建築職人」に、「農耕夫」の・ a^1 「量」の「労苦と煩勞」を、《獲得》／《支配》させることと、

ii) また、α) の「量」の「食糧」が、「農耕夫」にとり、 b^1 「量」の「労苦と煩勞」を「家屋建築職人」に、《肩代り》させ・《負担》させ・《転化》させ、

β) 反対に、 b 「量」の「家屋」が、「家屋建築職人」にとり、 a 「量」の「労苦と煩勞」を「農耕夫」に、《肩代り》せしめ・《負担》せしめ・《転化》せしめることは、

iii) <すべて> 合して、「商品」の「交換」という《同一事》であり、

iv) そして、上記・ii) が語っているのは、

α) a^1 「量」の「労苦と煩勞」と、 b^1 「量」の「労苦と煩勞」とは、

β) <互いに>《等しい》ものでなくてはならない、——ということであって、

γ) このことが、前記・e) の〈問い〉にたいする〈答え〉であるように、見える。——

f) ところがしかし、ア) 上記・e)，ア)ーオ) は、〈いまだ〉、

i) a^1 「量」の「労苦と煩勞」と、 b^1 「量」の「労苦と煩勞」とが、

α) 上記・e)，オ)，iv) のとおり、——<互いに>《等しい》ものでなくてはならないにせよ、——

β) 〈いかにして〉, 〈互いに〉《等しい》ものでありうるか, という〈問い〉には,

ii) 〈答えて, いない〉のである。

イ) なにゆえに, 〈答えて, いない〉, とされるか, と言え。ば。

i) a「量」の「食糧」と, b「量」の「家屋」との・それぞれの「使用価値」の「生産」のために「支出」された『代償』としての・a¹「量」の「労苦と煩勞」と, b¹「量」の「労苦と煩勞」とは,

α) ほかならぬ, a¹「量」の「農耕夫・労働」と, b¹「量」の「家屋建築職人・労働」とであり,

β) それゆえ, 〈互いに〉「質の面で相異なる」「労苦と煩勞」であるため,

ii) 言うまでもなく, 《等置》され《えない》からである。

ウ) こうして, i) 前記・e) の〈問い〉が, 真実に, それの〈答え〉を得,

ii) すなわち, α) a「量」の「食糧」のもつ「交換価値」の「大きさ」とは, a「量」の「食糧」が「農耕夫」に《獲得》／《支配》せしめる・b¹「量」の・「家屋建築職人」の「労苦と煩勞」であり,

β) また, b「量」の「家屋」の「交換価値」の「大きさ」は, b「量」の「家屋」が, 「家屋建築職人」にとり, 「農耕夫」に《肩代り》させ・《負担》させ・《転化》させる・a¹「量」の「労苦と煩勞」である, ——とする〈規定〉の〈根拠〉(〈論理〉)が, 《得られるためには》,

iii) a¹「量」の「労苦と煩勞」と, b¹「量」の「労苦と煩勞」とが,

iv) 一方で, α) a「量」の「食糧」, b「量」の「家屋」・各々の「使用価値」の「生産」においては,

β) 「農耕夫・労働」と, 「家屋建築職人・労働」として, 「質の上で相異なる」ものでありながら,

v) しかし, 同時に, 他方で, α) a「量」の「食糧」とb「量」の「家屋」との「交換」においては,

β) それぞれ、互いに〈他〉の〈生産者〉（「家屋建築職人」，「農耕夫」に，
《肩代り》され・《負担》され・《転化》されうるように，

γ) そして，それゆえ，〈互いに〉《等しい》，とされうるように，

δ) 《等質》のものでなければならぬのであって，

エ) したがって，「商品」が有する「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉し
うるには，上記・ウ)，iii)－v) の〈論理上の困難〉を〈超える〉ことが，
〈必須〉であり，

オ) K^1 , K^2 の表現を以ってすれば，「商品となって現われる」「労苦と煩勞」
の「二重刻印」の〈論理〉を立てることが，〈不可欠〉なのである。――

g) スミスが，上記の〈困難〉を〈超える〉〈論理〉を示しているのは，同
じ「第五章」の・しかし，「第7パラグラフ」中の・下記の論述において，で
ある。

「[1.] 複数の・等量の労働は，あらゆる時とあらゆる場所とをつうじて，
労働する者に，互いに等しい代償を必要ならしめるものである，と言
うことができる。[2.] [すなわち，] 労働する者は，世間で平均水準の⁵⁷⁾ 健康，
体力，気力をもち，世間で平均程度の⁵⁷⁾ 技倆と作業の敏速とをそなえている
場合には，[複数の・等量の労働にさいして，] いつも必ず，同一の量の・身
心の安らぎと，同一の量の気促と，同一の量の楽しみとを，手放さざるをえ
ないのである。[3.] 労働する者が支払う・この対価は，いつも必ず，同一
[の量] であらざるをえないのであり，労働する者が，この・支払う対価の見

57) 'ordinary' なる「イングランド語」は，〈語形〉の上では，「古典ラテン語」および「中
世ラテン語」・'ordinārius' ([オールディナーリウス]) に由来するが，ここに用い
られている場合の語意は，（「古典ラテン語」における・〈二つ〉の語意のうち，「中
世ラテン語」に継承された・「適正な順序 [／序列] をなすところ」の語意を除いた）・
「通常の」，「慣例の」，「世間で等し並みの」，「世間平均の」，等である。

返りとして受け取る・財貨の量の多少には、かわりがないのである」⁵⁸⁾。

([1.], 等と, 括弧内・補完とは, 引用者による)

ア) 上掲・[1.] にあって,

i) まず。「複数の・…労働」が「労働する者」に「必要ならしめる」「代

58) WoN., Vol. 1 p. 50

But as a measure of quantity, such as the natural foot, fathom, or handful, which is continually varying in its own quantity, can never be an accurate measure of the quantity of other things ; so a commodity which is itself continually varying in its own value, can never be an accurate measure of the value of other commodities. [1.] Equal quantities of labour, at all times and places, may be said to be of equal value to the labourer. [2.] In his ordinary state of health, strength and spirits ; in the ordinary degree of his skill and dexterity, he must always lay down the same portion of his ease, his liberty, and his happiness. [3.] The price which he pays must always be the same, whatever may be the quantity of goods which he receives in return for it.

なお。上掲・「第 6 行目」の 'In his ordinary state …' から, 「第 7 行目」の '… his skill and dexterity,' までは, 「第 2 版」で初めて現われて, 著者の歿後・最初の「第 6 版」に至る間, 付加された叙述であり,

したがって, 「初版」では, 「第 7 行目」の 'he' が, 'He' であった。(「初版」から「第 6 版」まで。一橋大学・『社会科学・古典文献センター』所蔵。Die Bibliothek des Prof. Carl Menger. 分類番号。Eng. 1412 (1 st ed. London, Printed for W. Strahan ; and T. Cadell, in the Strand. 1776) ; Eng. 1413 (2d ed., 1778) ; B) ; Eng. 1414 (3d ed., 1784) ; Eng. 1415 (4 th ed., 1786) ; Eng. 1416 (5 th ed., 1789) ; 同・『センター』所蔵。貴重書。分類番号。A・900 (6 th ed., 1791)。

また, 「第 2 版」で上記の文言が現われた経緯についての・'The Glasgow Edition' 中・'WoN.' の校訂者・W. B. Todd による〈推測〉の《失当》と,

上掲の・付加された文言を含む・スミスの立論に K^2 が(「第一章。商品」。「2) 商品となって現われる労働の二重刻印」。最終「第 32 パラグラフ」への「脚注・16」で)〈三点〉にわたり加えた〈批判〉の《過誤》とについては,

あらためて, 本稿・後出に述べられる。

償」と言われるものは、

α) 「労働する者」における・「身心の安らぎ」・「気促」・「楽しみ」の「手放し」・《放棄》の裏面であるもの、すなわち、

β) 「世間で平均水準」の「健康、体力、気力」の「支出」と、「世間で平均程度」の「技倆と作業の敏速」の「支出」——すなわち、「世間で平均」の「労苦と煩勞」の「支出」——という『代償』以外の・なにものでも、なく、

γ) しかも、「平均水準」、「平均程度」である以上、「農耕夫」が「支出」するか、「家屋建築職人」が「支出」するか、による・「質」の面での《相違》の《ない》「労苦と煩勞」という『代償』、

δ) すなわち、「支出」において《無態様》の—— K^1 , K^2 の表現を以ってすれば、「人間トシテ」「支出」するところの——「労苦と煩勞」という『代償』を、意味するものである⁵⁹⁾。

ii) つぎに。こうした「代償」を「必要」とする「複数の……労働」とは、

α) 前掲の例をとれば、a「量」の「食糧」、b「量」の「家屋」・各々の「使用価値」を「生産」するために「支出」される『代償』としての・ a^1 「量」の「農耕夫・労働」、 b^1 「量」の「家屋建築職人・労働」を措いてほかにはありえず、

β) ないしは、「農耕夫」が「支出」する・ a^1 「量」の、また、「家屋建築職人」が「支出」する・ b^1 「量」の、「労苦と煩勞」、

γ) すなわち、「質の面で相異なる」——換言して、「支出」の《態様》を有

59) この理由に基づいて、 K^2 による〈批判〉の〈一つ〉、——すなわち、スミスは、「労働する力の支出」を、「標準の生命発動としては、さらさら、とらえていない」——、とするのは、全くの《過誤》である。

なぜなら、スミスがここで語っているのは、ほかでもなく、 K^1 , K^2 の言う「人間としてもつ・労働する力の支出」——「人間トシテモツ・脳髓の力、筋肉の力、神経の力、手の力、その他の力の・生産にあたっての支出」、しかも、「社会を通じて平均水準」の「支出」のことであるからである。

する——「労苦と煩勞」にほかならないことも、また、明らかである。

イ) そこで、再言すれば、 i) 前記・ア), i), すなわち、 α) 「複数の・…労働」にとって「必要」である「代償」とは、

β) 「支出」の《態様》を有する・ a^1 「量」の「労苦と煩勞」、および、 b^1 「量」の「労苦と煩勞」にとって「必要」であり、

γ) とりもなおさず、それと《不可分離》でありながら、

ii) しかし、 α) 「支出」において《無態様》である「代償」、

β) それゆえ、別に表記すれば、—— a^2 「量」の「労苦と煩勞」、ならびに、 b^2 「量」の「労苦と煩勞」、——とされるものであることになる。

ウ) 上記の・ a^2 「量」と b^2 「量」との・《無態様》の「労苦と煩勞」は、

i) もとより、 α) 一面で、《現実には》、「質」・「支出」の《態様》を有する「労苦と煩勞」と、《不可分離》ではあるけれども、

β) しかし、他面で、「思考によって」、上記の「労苦と煩勞」から、「分離された」ものである。

ii) すなわち、 α) 上記・i) α) のように、《不可分離》である理由は、

β) 《無態様》の「労苦と煩勞」こそが、(スミスの表現では)、「労働」が、「労働する者に」、「必要ならしめる」ものであり、

β) 換言して、〈一切〉の・《態様》を有する「労働」を、「交換」における「代償」としての「労苦と煩勞」たらしめるものである、——というところにあるのであり、

iii) しかし、 α) 他面で、上記・i), β) のとおり、「思考によって」「分離された」ものである理由は、

β) 《無態様》の「労苦と煩勞」——言い換えれば、「世間で平均水準の健康、体力、気力」の「支出」と、「世間で平均程度の技倆と作業の敏速」との「支出」——における・「世間で平均水準の」、また、「世間で平均程度の」という規定は、「(平均値)を《現実には》有するものは、総じて、《実在しない》のであり、「平均値」は、「思考」の〈所産〉にほかならないのであるから、)

一つの・「思考による」《想定》であるところに、あるのである。——

エ) しかしながら、前記の・ a^2 「量」と、 b^2 「量」との・それぞれの「労苦と煩勞」は、

i) 《無態様》のものであり、

ii) したがって、 α) 《等質》であって、

β) それゆえ、《等質》の「継続時間」という「尺度」によって「測られうる」もの、

iii) すなわち、「継続時間」によって「測られ」、〈比較〉されて、「互いに等しい」、とされうるものであるとはいえ、

iv) α) a^2 「量」と、 b^2 「量」との・《無態様》の「労苦と煩勞」が「測られる」・その「継続時間」は、

β) 《様態》を有し・「質の面で相異なる」・ a^1 「量」と、 b^1 「量」との「労苦と煩勞」が「支出」される「継続時間」以外のもものでは、ありえないのである。

v) なぜなら。 α) 《無態様》の「労苦と煩勞」が、《態様》を有する「労苦と煩勞」から《分離》されて「支出」されることは、《ありえない》のであり、

β) したがって、《無態様》の「労苦と煩勞」の「支出」される「継続時間」が、《態様》を有する「労苦と煩勞」の「支出」される「継続時間」から《分離》されることも、《ありえない》からである。

オ) そこで、《無態様》の「労苦と煩勞」は、

i) それが、上記・ウ)、エ) のものであることによって、

ii) 「交換」において、 α) —— もとより、「質の面で相異なる」・ a^1 「量」と b^1 「量」との「労苦と煩勞」が「支出」される各「継続時間」の《等しさ》に基づいて——、 a^2 「量」と b^2 「量」との・「労苦と煩勞」として、〈互いに〉《等しい》、と「思考」され、

β) すなわち、「農耕夫」と「家屋建築職人」との間に、〈互いに〉《肩代り》

され合い・《負担》され合い・《転化》され合い〈得る〉「労苦と煩勞」である、と「思考」されるのである。——

h) こうして、ア)「商品」の有する「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉を成立せしめる〈論理〉は、

イ) スミスにあっては、上記・b)－g)であって、

ウ) 前掲・「第五章」・「第2パラグラフ」の・[2.]－[3.]、および、[7.]の論述は、以上に〈分析〉された〈論理〉に基づいているものである。その論述を、再示すれば。

「[2.] ひとつひとつの物[商品]が、それを確保してはいるが、しかし、それを処分する必要に迫られている人、すなわち、それを、なにか・ほかの物[商品]と交換する必要に迫られている人にとって、現実にもつ値打ち[「交換価値[の・大きさ]」]は、[3.] [a.] 当の物[商品]が、当該の人にとり、[他人に]肩代りさせることができる・労苦と煩勞と[の量]であり、[b.] すなわち、当の物[商品]が[、それを、交換によって確保する必要に迫られている・]ほかの・多数にのぼる人々に負担させることができる・労苦と煩勞と[の量]である。… [7.] …, [a.] 富[商品]を所持し・しかも、その富[商品]を、なにらかの・新たな生産物と交換する必要に迫られている人々にとって、その富[商品]がもつ[交換]価値[の・大きさ]は、[b.] 当の富[商品]が、そうした人々に、獲得することを得さしめることができ、支配することを得さしめることができる・[ほかの人々の・]労働の量と、精確に、等しいのである」⁶⁰⁾。

i) 以上から言いうるのは、下記の事柄である。ア) i)「商品」の「使用価値」を「生産」する・《態様》を有する「労苦と煩勞」という『代償』と《不可分離》の・〈いま一つ〉の・《無態様》の『代償』たる「労苦と煩勞」が、

ii) 上記の「生産」にあたり、《態様》を有する「労苦と煩勞」の「継続時

60) cf. 前出・脚注・56) に掲げた原文。

間」にわたる「量」において「支出」される、と「思考」されるのであって、

イ) 「商品」の「交換」は、その〈論理〉にあっては、

i) かかる「量」の・《無態様》の「労苦と煩勞」が、当該〈生産者〉に、総じて〈他〉の〈生産者〉が「支出」した・それと《等量》の・《無態様》の「労苦と煩勞」を、「獲得」／「支配」せしめることであり、

ii) あるいは、当の「商品」が、当該〈生産者〉にとり、かかる「量」の・《無態様》の「労苦と煩勞」を、総じて〈他〉の〈生産者〉に、「肩代り」させ・「負担」させ・《転化》せしめることであって、

ウ) したがって、上記・イ)の〈論理〉に基づいて、各「商品」が有する「交換価値」の「大きさ」が、〈規定〉されるのである。

エ) ところで、この・イ)の〈論理〉における「労苦と煩勞」は、

i) α) 一面で、「商品」の「使用価値」を「生産」する「労苦と煩勞」と《現実には》《不可分離》でありながら、

β) しかし、他面で、「商品」の「交換価値」の「大きさ」の《同等》となって《現われ出るもの》——すなわち、「商品」の「価値」——の「形成基体」である、と「思考」されるほかないものであるから、

ii) したがって、上記の〈論理〉は、また、「商品となって現われる・労苦と煩勞の二重刻印」の〈論理〉でもあることになる。——

オ) こうして、スミスにあって、i) α) 「労働する者」が、「労働」するにあたって、「身心の安らぎ」・「気促」・「楽しみ」を「手放し」・《放棄》することの裏面であるもの、

β) すなわち、「世間で平均水準の健康、体力、気力」と「世間で平均程度の技倆と作業の敏速」との「支出」たる・《無態様》の「労苦と煩勞」（「労働」）——が、

ii) K^1 , K^2 にあって「価値形成基体」とされるもの——「人間トシテモツ・脳髓の力、筋肉の力、神経の力、手の力、その他の力の・生産にあたっての支出」（「人間としてもつ・労働する力」の「支出」たる「人間として行う労働」）

働」。《無慾様》の「労働」——と、《同一》のものである。

カ) i) スミスの用語・「労苦と煩勞」ないし「労苦」は、プラ・ト・ォーン⁶¹⁾の用いる‘*πόνος*’ (「労苦」) の語を念頭においているもの、と推測されるのであって、

ii) プラ・ト・ォーンは、‘*πόνος*’ の概念ゆえに、「見えざる手に導かれて」、スミスを、「商品となって現われる・労苦と煩勞の二重刻印」の〈論理〉に至らしめた、と言えるかも知れない⁶¹⁾。

13) ところで。a) 前掲・「第五章」・「第2パラグラフ」の・[2.]—[3.], [7.] において、

ア) 「商品」のもつ「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉にかんする〈論理〉が示されるにあたっては、

「[2.] ひとつひとつの物[商品]が、それを確保してはいるが、しかし、それを処分する必要に迫られている人、すなわち、それを、なにか・ほかの物[商品]と交換する必要に迫られている人にとって、現実にもつ値打ち[「交換価値」の「大きさ」]は、…」と述べられ、

i) すなわち、「交換価値」(の「大きさ」)は、当該の「物」(「商品」)の《生産者》「にとって」のもものとされているのであるから、

ii) 当然、ここに、——前述の〈論理〉が、「商品」の《生産者》ならざる者(すなわち、「商品」の・単なる《所持者》、および、「鑄貨」の《所持者》)についても、なお、《妥当しうるか》、——との〈疑問〉が生じないでは、いないことになる。

イ) すなわち。i) 既に見た・[2.]—[3.], [7.] の論述の〈論理〉は、再言すれば、

α) 例えば、a「量」の「食糧」の《生産者》たる「農耕夫」と、b「量」

61) 予め言え。プラ・ト・ォーン-スミスの所論から、以上のように〈分析〉される〈論理〉は、本稿・後出・V. 15), 16) が示す〈論理〉に、接合するものである。

の「家屋」の《生産者》である「家屋建築職人」との間での・各「生産物」・「商品」の「現物互換」を《前提》し、

β) 「互換」される・これらの「商品」の〈各々〉が有する「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉を、得るものであった。

ii) しかしながら、α) もし、「農耕夫」が、「家屋建築職人」との「交換」によって「獲得」し・「分かち取った」・b「量」の「家屋」を、

β) 自らの「必要」の「充足」にあてることなく、

γ) 自らが《所持》している・その・b「量」の「家屋」という「財貨」を以って、第三者たる《生産者》から、その「生産物」・「商品」—— c「量」の d・「物」——を「購買」する、とした場合には、

iii) α) 「農耕夫」は、b「量」の「家屋」の・《生産者》ならざる《所持者》にすぎないのであるのであるから、

β) b「量」の「家屋」が c「量」の d・「物」にたいして有する「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉するにあたっては、

γ) 前記の〈論理〉は、《妥当しえない》のではあるまいか、という〈懸念〉が、生じざるをえないのであり、

iv) その理由は、—— 前記の〈論理〉は、

α) b「量」の「家屋」の《生産者》たる「家屋建築職人」が「支出」した・ a^2 「量」の・《無態様》の「労苦と煩勞」が、

β) b「量」の「家屋」の《所持者》であるにすぎず・したがって、 b^2 「量」の・《無態様》の「労苦と煩勞」を「支出」することのなかつた「農耕夫」に、

γ) c「量」の d・「物」(ないし、 c^2 「量」の・《無態様》の「労苦と煩勞」)を、「獲得」／「支配」せしめる、—— という〈論理〉では、

δ) 《ない》のであるからであり、

v) ないしは、α) b「量」の「家屋」が、

β) その《所持者》たるにとどまる「農耕夫」にとって、

γ) c「量」の d・「物」の《生産者》に、 c^2 「量」の・《無態様》の「労苦

と煩勞」を、「肩代り」させ・「負担」させ・《転化》せしめるものである、——という〈論理〉では、

δ) 《ない》、というところにあるのである。

ウ) さらにまた、スミスが、i) 先行・「第四章」・「第 11 パラグラフ」で、
「このような経緯により、文明諸国民の・ことごとくにあっては、鑄貨は、商業の・隅々まで行き渡った促進手段となっており、この鑄貨の介入によってこそ、あらゆる種類の財貨が、売買され、すなわち、互いに交換されているのである」⁶²⁾、としている以上、

ii) α) 例えば、「農耕夫」は、「家屋建築職人」との間で、a「量」の「食糧」と b「量」の「家屋」とを「現物互換」するのでは、〈なく〉、

β) a「量」の「食糧」と「交換」した・なにらかの単位の「鑄貨」の・ある「量」の《所持者》として、その「量」の「鑄貨」を以って、b「量」の「家屋」なり、ないしは、c「量」の d・「物」を、「購買」するのが、〈通常〉であってみれば、

iii) この場合にも、前記・イ) の場合と〈ひとしく〉、あの〈論理〉の《妥当性》にたいする〈疑念〉が、抱かれずにはいないのは、自然である。

b) しかしながら、スミスは、ア) i) ——「財貨」(前例での・b「量」の「家屋」という「商品」)の《所持者》と、その《生産者》との間には、《なんらの相違もない》のであり、

ii) α) また、「鑄貨」とても、「労働」の「生産物」であり「商品」であるに《ほかならず》、

β) したがって、その《所持者》と《生産者》の間にも、《なんらの相

62) WoN., Vol. 1 p. 44

It is in this manner that money has become in all civilized nations the universal instrument of commerce, by the intervention of which goods of all kinds are bought and sold, or exchanged for one another.

違もない》，—— という〈根拠〉（後出の〈論理〉に基づく）によって，

イ) i) α) 「商品」の「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉するさいの・前述の〈論理〉は，

β) 上記・a)，ウ)，iii) に挙げた・二つの場合にも，なにらの〈懸念〉・〈疑念〉も容れる余地なく《妥当する》ものである，として語るのが，

ii) 前掲・「第五章」・「第2パラグラフ」中の・[4.] [a.] [b.] [c.]；[5.]，[a.]，[b.] の論述であり，それを再示すれば，以下のとおりである。

「[4.] [a.] [私たちが所持している・なにらかの量の] 鋳貨ないし財貨を以って購買される物 [商品] [の・ある量] とは，[実は，] [私たちの] 労働 [の・ある量] によって獲得されるものなのであり，[b.] その労働の量は，私たちが，同じ・その物 [商品] を，私たち自身の労苦によって [生産／] 確保する場合の・その労苦の量に，等しいのである。[c.] [そして，] 物 [商品] を購買する場合の・こうした [・私たちが所持している・なにらかの量の] 鋳貨ないし財貨は，実を言えば，私たちにとり，今言った [・その物 [商品] を生産／・確保する場合の・私たちの] 労苦 [の量] を，[他人に] 肩代りさせてくれるものなのである。[5.] [a.] [すなわち，] そのような鋳貨ないし財貨は，ある量の労働にたいする支配力を含んでいるのであって，[b.] 私たちは，そうした・ある量の労働にたいする支配力を含んでいる [・なにらかの量の] 鋳貨ないし財貨を，その時に，それと等量 [の労働] にたいする支配力を含んでいる，と考えられる [・ある量の] 物 [商品] と，交換するのである」⁶³⁾。(括弧内・補完は，引用者による)

ウ) i) 前掲・[2.]－[3.]，[7.] におけると《同一》の〈論理〉が，上掲の全論述 ([4.]，[a.] 以下，[5.]，[b.] まで) を，一貫していることは，まぎれもないが，

63) cf. 前出・脚注・56) に掲げた原文。

ii) この・〈論理〉の《同一性》は、それ自体、再び、下記の〈論理〉に基づいているのである。

エ) まず。「鑄貨」も、「労働」の「生産物」であり「商品」であるに〈ほかならない〉、とする〈論理〉が、「第五章」・「第7パラグラフ」冒頭の・下記の叙述から、知られるのである。すなわち、

「しかしながら、^(きん)金と銀とは、ほかの・どの商品とも同じく、その〔交換〕価値が、変動するものであり、すなわち、ある時には、安価であり、ある時には、高価であり、言い換えて、ある時には、購買し易く、ある時には、購買し難い。^(きん)金や銀の・いずれか・個々の量が購買することができ、ないしは、支配することができる・労働の量、あるいは、そうした量と交換される・ほかの財貨の量は、いつも必ず、こうした交換が行われる時期に、たまたま世間に知れわたることになった鉱床の含有量の豊かさ、ないしは、乏しさに、左右されるのである」⁶⁴⁾。

i) すなわち。スミスにとっては、 α) 「鑄貨」の「量」とは、〈とりもなおさず〉、その〈材質〉たる「^(きん)金」ないし「銀」の「量」以外のものではなく、

β) 〈材質〉たる「^(きん)金」・「銀」は、〈言うまでもなく〉、「労働生産物」にほかならない。

ii) そして、〈同一〉の「量」の〈材質〉「^(きん)金」・「銀」、——即・「鑄貨」——なる「労働生産物」の「生産」にとり、

64) WoN., Vol. 1 p. 49

Gold and silver, however, like every other commodity, vary in their value, are sometimes cheaper and sometimes dearer, sometimes of easier and sometimes of more difficult purchase. The quantity of labour which any particular quantity of them can purchase or command, or the quantity of other goods which it will exchange for, depends always upon the fertility or barrenness of the mines which happen to be known about the time when such exchanges are made.

α) 「鉱床の含有量」の「豊かさ」という〈自然条件〉のもとでは、「支出」される「労働の量」は、〈より少〉であり、

β) 「鉱床の含有量」の「乏しさ」という〈自然条件〉にあつては、「支出」される「労働の量」は、〈より多〉であらざるをえないことは、もとよりである。

iii) それゆえ、「^(きん)金」・「銀」——すなわち、「鑄貨」——が、その《生産者》にして《所持者》である者にも、また、単なる《所持者》である者にも、「獲得」／「支配」せしめ・「購買」せしめる・〈他〉の〈生産者〉の「労働の量」(ないし、「労働」の「生産物」・「財貨」・「商品」の「量」)は、「変動」するのであり、

iv) こうして、「鑄貨」は、その「[交換] 価値」の「大きさ」が「変動」することにおいて、(〈自然条件〉および〈社会的・ならびに技術的分業〉なる〈社会条件〉によって、「交換価値」の「大きさ」が「変動」する)「ほかの・どの商品とも同じ」なのであって、

v) 要するに、「鑄貨」は、「労働生産物」の一つにすぎず、「商品」の一種にほかならないのである。——

オ) つぎに。「商品」の「交換価値」の「大きさ」を規定する〈論理〉としてこれまでに見たところからすれば、

i) α) 例えば、a「量」の「食糧」が「農耕夫」に、「家屋建築職人」の「労働生産物」たる・b「量」の「家屋」を、「獲得」／「支配」せしめるのは、

β) 「農耕夫」が、a「量」の「食糧」の「生産」にさいして、《無態様》の・ a^2 「量」の「労働」・「労苦と煩勞」を、「支出」し、

γ) その・ a^2 「量」の「労働」が、「家屋建築職人」によりb「量」の「家屋」の「生産」にあたって「支出」された・ b^2 「量」の・《無態様》の「労働」と、「等量」であることに、

δ) 基づく〈以外のものではない〉のである。

ii) してみれば、 α) 「農耕夫」が、a「量」の「食糧」と「交換」にb

「量」の「家屋」を「獲得」／「支配」しており、すなわち、その《所持者》である、ということは、

β) 「農耕夫」が、 b^2 「量」の「労働」の「支出」者、とりもなおさず、 b 「量」の「家屋」の《生産者》であることと、《同一事》なのであって、

γ) あの〈論理〉を形づくる事柄—— a 「量」の「食糧」は、「農耕夫」にとり、自らが b 「量」の「家屋」の「生産」するとすれば「支出」すべかりし・ b^2 「量」の・《無態様》の「労働」・「労苦と煩勞」を、「家屋建築職人」に、「肩代り」させ・「負担」させ・《転化》せしめるものである、と言われる事柄——の意味は、上記・α), β) にあるのである。

iii) したがって、α) 「農耕夫」が、自らの《所持》するに至った・ b 「量」の「家屋」を、(自らの「必要」の「充足」にあてることなく)、これを以って、他の「財貨」・ c 「量」の d ・「物」を「購買」するにしても、それは、

β) 「農耕夫」が、 b 「量」の「家屋」の《生産者》たる「家屋建築職人」として、 b 「量」の「家屋」を、 c 「量」の d ・「物」と、「交換」していることに、〈ほかならない〉のである。

iv) さらに。α) 「鑄貨」もまた、既述のとおり、「労働生産物」・「商品」の一つにすぎない以上、

β) 例えば、「農耕夫」が、 a 「量」の「食糧」を、 e 「量」の・ある単位の「鑄貨」と「交換」し、これを以って、 b 「量」の「家屋」なり、ないしは、 c 「量」の d ・「物」を、「購買」することも、

γ) 上記・iii)・α), β) と《同一》の事柄に、帰するものである。

δ) なぜなら、上記の場合の「鑄貨」と、「農耕夫」が c 「量」の d ・「物」の「購買」にあてる場合の・ b 「量」の「家屋」とは、《同一物》にほかならないからである。

c) 上記に示した〈論理〉により、ア) 「[私たちが所持している・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨」と、〈他〉の「物」・(「商品」たる「労働生産物」とが、「交換」される場合にも、

イ) 「商品」の「交換価値」の「大きさ」の〈規定〉にかんする〈論理〉は、そのまま《妥当》するのであって、

ウ) かくして貫かれる・〈論理〉の《同一性》が、前掲・[4.] [a.]—[5.] [b.] の論述となって、言表されているのである。

エ) 上述の〈論理〉に明らかなおとおり、

i) α) なにらかの「量」の・ある「商品」、ないし、その「商品」の「生産」にさいして「支出」された「労働の量」(《無態様》の「労苦と煩勞」の「量」)を、

β) 「獲得」／「支配」し・「購買」する「力」を有するのは、

ii) 〈他〉の「商品」の「生産」にあたって「支出」された・「等量」の「労働」のみであり、

iii) 「^(きん)金・銀」を〈材質〉とする「鑄貨」自体では、〈ない〉のである。(「鑄貨」の「生産」にあたり「支出」された「労働の量」は、その「力」を有するにしても)。――

オ) 「第五章」・「第2パラグラフ」の(実質上の)〈結語〉が、前掲・[5.] [b.] につづいて下掲のように述べられる時、意味されているのは、上記・エ)である。

「[6.] 労働[の量]が、あらゆる物の代価として支払われた・根源にある代償であったし、根本をなす獲得鑄貨であった。地上にある・あらゆる富が、根本にあって獲得されたのは、^(きん)金によるのではなく、ないしは、銀によるのではなくて、労働[の量]によるのであった」⁶⁵⁾。

14) さて、つぎに。 a) 「第五章」・「第3パラグラフ」の論述は、以下のとおりである。

「[1.] 富とは、ホブズ氏の言うとおおり、力である。しかしながら、巨富を確保し、ないしは、相続した人であっても、必ずしも、民政上であれ、軍

65) cf. 前出・脚注・56) に掲げた原文。

事上であれ、なんらかの・国政上の権力を、確保し、ないしは、相続する、
 というわけでは、ない。〔2.〕当人の資産は、おそらく、その・双方の権力
 を確保する手段を、当人に与えはするであろう。がしかし、その資産は、そ
 れをただ所持しているというだけでは、当人に、必ずしも、上記の権力の・
 いずれかを手に入れさせるわけでは、ないのである。〔3.〕資産の所持が、
 それの所持者に、立ち所に、手段としてではなくて直に、手に入れさせる力
 とは、〔a.〕その時に、販売のため市場に出されている・あらゆる労働〔の・
 ある量〕を、ないしは、あらゆる労働生産物〔の・ある量〕を、獲得する力
 であり、〔b.〕すなわち、あらゆる労働、ないしは、あらゆる労働生産物の・
 ある範囲を、支配する力である。〔4.〕当の所持者の資産は、〔a.〕上記
 の力の範囲に精確に応じて、大であるか、小であるか、であり、〔b.〕ある
 いは、その資産が所持者に、獲得することを得さしめ、支配することを得さ
 しめる・ほかの人々の労働の量に精確に応じて、〔c.〕ないしは、同じこと
 であるが、ほかの人々の労働生産物の量に精確に応じて、大であるか、小で
 あるか、である。〔5.〕ひとつひとつの物〔商品〕がもつ交換価値〔の・大
 きさ〕は、いつも必ず、その物〔商品〕が所持者の手に入れさせる・上記の
 力の範囲に、精確に等しいものであらざるをえない」⁶⁶⁾。

66) WoN., Vol. 1 p. 49

〔1.〕 Wealth, as Mr. Hobbes says, is power. But the person who either
 acquires, or succeeds to a great fortune, does not necessarily acquire or succeed
 to any political power, either civil or military. 〔2.〕 His fortune may, perhaps,
 afford him the means of acquiring both, but the mere possession of that fortune
 does not necessarily convey to him either. 〔3.〕 The power which that possession
 immediately and directly conveys to him, is [a.] the power of purchasing ; [b.] a
 certain command over all the labour, or over all the produce of labour which is
 then in the market. 〔4.〕 His fortune is greater or less, [a.] precisely in propor-
 tion to the extent of this power ; [b.] or to the quantity either of other men's
 labour, or, [c.] what is the same thing, of the produce of other men's labour, which

ア) 見られるとおり、上掲の論述のうち、[3.] 以下、最終・[5.] に至る間のそれは、「第2パラグラフ」について分析された〈論理〉にしたがうものに、ほかならないのであるから、

イ) 吟味されるべきは、ただ、—— スミスが、ホブズの言・「富とは、力である」を、果たして、正当に理解しているか、否か、—— のみである。

b) スミスは、ア) まず、「富とは、力である」、とする時の「力」のもとに、ホブズは、「国政上の権力」を考えている、とし、

イ) ついで、i) しかし、「富とは、力である」、と規定されるさいの・「富」・「資産」と「力」との〈関係〉は、

α) 「富」・「資産」が、その「所持者」に、「国政上の権力」を「手に入れさせる」「手段」となる場合のように、〈間接〉の・かつ、〈時の経過を前提する〉観点から、規定されるべき〈関係〉では、〈なく〉、

β) 「富」・「資産」が、—— それを「ただ所持しているというだけで」、とりもなおさず、一つには、「所持」と〈同時に〉「立ち所に」、すなわち、〈時の経過なしに〉、二つには、「手段としてではなくて^(じか)直に」、〈直接に〉、——《な

it enables him to purchase or command. [5.] The exchangeable value of every thing must always be precisely equal to the extent of this power which it conveys to its owner.

‘The Glasgow Edition’中の‘WoN’・校訂者・Toddの調査では、「第二版」は、1778年2月28日に公刊され、1784年11月20日に、「第二版」への「付加と訂正」とが、刊行された。(Toddは、これを、2Aと呼んでいる)。

上掲の「第3パラグラフ」全体は、「第二版」の・この2Aに現われ、「第六版」に至るものである。

一橋大学・『社会科学・古典文献センター』に所蔵されるのは、前出・脚注・58)に記した「初版」、「第二版」、および、‘Burt Franklin Collection’中の「初版」、「第二版」のみであり、2Aは、所蔵されていない。

このパラグラフが「付加」された経緯にかんしては、Toddも、なんら、語っていない。

にものか》を、「所持者」の「手に入れさせる」「力」である、という観点から、その《なにもの》・「手に入れさせる」〈対象〉が、とらえられる、という〈関係〉であるべきであり、

iii) それゆえ、「富とは、力である」、とされるさいの「力」とは、ホブズが考えているのとは異なり、「国政上の権力」では、〈ない〉であって、前掲・[3.] [a.] 以下のものである、——と規定するのであるが、

ウ) しかし、果たして、i) ホブズ自身が、一つに、「力」の概念のもとに、「国政上の権力」を理解して〈いた〉か、否か、

ii) また、二つに、ホブズの場合、「富」は、〈直接〉の関係で・しかも〈時の経過なしに〉、「力」を生み出すものとして、とらえられては〈い〉なかったか、どうか、

iii) 要するに、ホブズ自身が、「富」と「力」との〈関係〉を、いったい、いかに把握していたのであるか——、

iv) 上記を、ホブズの連繫四著作を辿って、明らかにしなくてはならない。

c) まず、ア) EoL は、i) 「第一部」・「第八章」・「第一節」から、クリスト教会・最大の教父・アウレューリユウス・アウグウスティーヌウス (Aurélius Augustinus, A. D. 354–430) が、A. D. 400 に制作した “Cōfessionēs.” ([コォーンフェッスィォーネース]。『告白』)・「第十一編」に展開されている「時間」論⁶⁷⁾に基づいて、自らの論を進め、

ii) 「第三節」に至って、アウグウスティーヌウスの言う・「未来」(future) ないし「期待」(expectation) の概念を扱うにあたり、「未来という観念は、すべて、なにらかのものを産出しうる力(power)という観念である」、

67) cf. 拙稿・『「時間について」——アリストテレース、アウグスチーヌス、ロック』。

I. 一橋大学・研究年報・『社会学研究・21』。1982年9月。3–70ページ；II. 一橋大学・研究年報・『人文科学研究・22』。1983年12月。65–138ページ；III. (上記・I. と同号)。71–122ページ。

このうち、II.

とし、

iii) そこから、「第四節」にあって、「力」を形づくる「諸能力」と、「力」によって「確保」されるもの・「(例えば), 富, 権勢, 地位, 友情, ないし, 好意, 支援, 幸運——すなわち, 万能なる神が与える好意・支援」を挙げ,

iv) ついで、「第五節」で, 上記のものを「確保」する「力をそなえていることの承認が, 称揚 (HONOUR)」である, と規定し,

v) 「称揚」の〈対象〉を列挙する間に, (上記・iii) に基づいて), 「——そして, 富 (riches) は, 称揚に値するもの (honourable) である。富を確保した力 (the power) のしるし (signs) として。——」⁶⁸⁾と述べている。

vi) それゆえ, EoL にあっては, α) 「富」と「力」との〈関係〉は, ただ, ——「富」は, 「力」によって「確保」されるものの一つであり, (また, 逆に, 「富」は, 「力」への「手段」の一つである) ——というにすぎず,

β) その「力」とは, いかなる〈性質〉を有するか, については, 〈なんら〉, 語られるところが, 〈ない〉。——

イ) つぎに。 i) “Dē Hōmine.” ([デェー・ホオミィネェ]。『哲学の諸原理の第二部。人間について』。以下, DH と略記)・「第十一章」は, まず, 「欲求」と「逃避」, 「快さ」と「苦しみ」, および, 「それらの原因」についての論述から, 「よいもの」の〈規定〉に進み,

ii) 「第六節」で, 「よいものの・第一に位するのは, なんびとにとっても, 自らの生命保存である。…逆に, あらゆる・わるいものの・第一に位するのは, 死であり, …」, とするのにつづき,

iii) その「生命保存」にとり「前衛」(praesidium [プラァエスイディウム]) となるもの, という視点から, 「力」の概念を規定して,

α) 第一に, 「力 (poténtia [ポォテェンツィア]) は, それが卓抜なものであれば, よいものである。なぜなら, 卓抜な力は, 前衛として役に立つもの

68) 以上, EoL, pp. 31–35

であり、そして、前衛の中には、生命の安全があるからである。力は、卓抜なものでなければ、役に立たない。なぜなら、万人に同等な力とは、無力にひとしいからである」、と述べ、

β) 第二に、「友情は、よいものである。なぜなら、友情は、役に立つものであるからである。というのは、友情は、他の・多くに資するのとひとしく、前衛としても資するものであるからである。敵意は、危険を招き、前衛を取り除くがゆえに、わるいものである」、とするのにつづき、

iv) 「第七節」で、第三に、「富(Divítiae [ディーウィツィアエ])は、ルウクウツルルス⁶⁹⁾が、富者(díves [ディーウェス])とは、自らの資産により軍隊の補給を行いうる人間のことである、と定義したように、巨大であれば、役に立つものである。なぜなら、かかる・巨大な富は、常に、確実な前衛であるからである。しかし、ほどほどの富であっても、それを前衛として用いようと意志する者にとっては、役に立つものである。なぜなら、ほど

69) ルウクウツルルス(Lúculus)は、リィキィニウス(Licinius)氏族に属する家族名の一つで、この家族出身の・最も有名な人物は、ルウキィウス・リィキィニウス・ルウクウツルルス(Lúcius Licinius Lúculus)である。これは、ローマを頻りに脅かした・黒海地域(Pontus [ポントゥス]/Πόντος [ポントォス]。現在のトルコ・北東部の Trebizond/Trabzon と中央部の Sivas とにわたる)の王・ミイトッリダアーテース(Mithridátēs/Μιθριδάτης, 120 B. C. – 63 B. C.)に対抗した軍司令官であるが、巨万の富と浪費とによって高名であった、という。

しかし、キィケェロォは、ルウクウツルルスがギリシャ哲学に造詣深い人物であり、当時の・高名な弁論家・ホルテェーンスイウス(Quíntus Horténsius Hórtalus [クゥイントゥス・ホルテェーンスイウス・ホォルタアルウス])。「ホォルタアルウス」は、添え名の・カムパーニア在・バァウリィー(現在のバァコォロォ)の別荘で、自らルウクウツルルスと議論を交し合った、と述懐しており、また、その学殖をたたえるために、『アカァデェーミィーアの諸学説。第二編。ルウクウツルルス』(“Acadēmica. Liber sēcundus. Lúculus.”・全・四十八章)を、著した。(The Loeb Classical Library. Cicero in twenty-eight volumes. XIX. Cambridge (Mass.), Harvard U-P., Lond., William Heinemann. 1979. pp. 464–658 ; 9, p. 476)

ほどの富は、友情を確保するものであり、そして、友情とは、前衛に属するものであるからである。けれども、ほどほどの富でも、これを前衛として用いようと意志しない者にあっては、他人の嫉妬をかき立てるものである⁷⁰⁾。』、としている。

v) 上掲の諸論述によってみれば、

α) 「巨大な富」は、それ自体にあって、〈所持者〉にとり、「生命保存」のための「力」たる「前衛」（「軍隊」）を、「確保」せしめる「力」の一つであり、

β) 「ほどほどの富」は、その〈所持者〉にとって、「友情」という・「生命の安全」に資する「力」としての「前衛」を、「確保」させる「力」の一つである、——と規定することができる。

vi) こうして、DH は、 α) 「富」は、「軍隊」なり「友情」なりの形姿において、

β) 「生命保存」・「生命の安全」を〈目的〉とする「前衛」という「力」を、〈所持者〉に「確保」せしめる「力」の一つである、——というところに、

γ) 「富」と「力」との〈関係〉を据えているのであるが、

vii) この立論にあっては、 α) 「生命保存」が〈根源目的〉である以上、

β) 「富」が「前衛」という「力」を〈所持者〉に「確保」せしめるのは、

γ) 「立ち所に」、かつ、「手段としてではなくて直に^(じか)」、のみであることは、自明である。

d) 以上に示した・DH における立論は、EoL に記されていた論述をまじえてながら、Lev・E、Lev・L に再現する。

ア) すなわち、Lev・E は、 i) その「第一部」・「第十章」・「第1パラグラフ」から、「力」(Power) の概念の吟味を開始し、

ii) 「人間がそなえる力」のうち、 α) 〈第一〉の種類として、「自然にし

70) DH., pp. 98—99

たがう力」——すなわち、「身体ないし心の諸能力」——の「傑出」たる「卓越した体力、容姿、思慮、技能、能弁、気前のよさ、高邁」を挙げ、

β) <第二>の種類を、「手段としての力」、換言すれば、「富、名声、友人、神の・かくれた働きとしての好運」とし、(第1—第2パラグラフ)、

iii) そして、<第一>の種類「力」の「合成」たる・<第三>の種類について、——「人間がそなえる力の・最大のものは、同意によって、単一の人格に融合された・おびただしい数にのぼる人々の・自然にしたがう力から合成された力」であり、ないしは、「おびただしい数にのぼる人々・すべての力の行使が、単一の人格の意志に依拠する・国家の力」である、——と規定し、そこから、

iv) ひとしく、「自然にしたがう力から合成された力」ではあるが、

α) しかし、「国家の力」の<下位>にある「力」を、

β) 「それゆえ、擁護者(servants)をもつことは、力である。友人(friends)をもつことは、力である。なぜなら、擁護者・友人とは、[本人の・力の強さと] 融合された・力の強さ(united strength)であるからである」、と<帰結>させ、「第3パラグラフ」

v) α) この<帰結>に、

β) 上記の・「融合された・力の強さ」としての「擁護者・友人」を「確保」せしめる「力」たる「富」(前掲の・<第二>の種類・「手段としての力」の一つ)を、

γ) <接合>させて、こう言う。

「富(Riches)もまた、気前のよさ(Liberality)と結びつけば、力(Power)である。なぜなら、かかる富は、友人を、また、擁護者を、確保するからである。[だがしかし、富は、] 気前のよさを伴わなければ、そうではない。なぜなら、その場合には、富は、持主を防衛する(defend)のではなく、持主を、嫉妬にさらし、嫉妬の餌食にするからである」⁷¹⁾。(「第4パラグラフ」)(以

71) 以上, Lev・E, p. 150

上、括弧内・補完は、引用者による)

vi) スミスが、「富とは、ホブズ氏の言うとおりの力である」、とするのは、上掲・冒頭の「富もまた、気前のよさと結びつけば、力である」の文言を指してのことである。

vii) Lev・Lの論旨(「第一部」・「第十章」・「第1－第5パラグラフ」)も、Lev・Eのそれと、同一であり⁷²⁾、Lev・Eの‘united strength’は、‘vīrēs ūnitae’([ウィー・レース・ウーニタエ]。「融合された強力」と表現されている。

e) ア) 上掲・Lev・E, Lev・Lの叙述には、i) DHと異って、「生命保存」・「生命の安全」なる語こそ現われていないものの、

ii) しかし、言うまでもなく、「人間がそなえる力の・最大のもの」たる「国家の力」とは、「平和」すなわち「生命保存」・「生命の安全」を〈目的〉とする「力」の「最大のもの」以外の・なにものでもないのであるから、

iii) α) かかる「国家の力」の〈下位〉にある・「擁護者・友人」という・「[本人の・力の強さと] 融合された・力の強さ」の〈目的〉もまた、

β) 「擁護者・友人」の「力の強さ」を、自らの「力の強さ」に「融合」しようとする「本人」の「生命保存」以外のものではなく、

γ) そして、(「気前のよさ」に伴われた)「富」は、この「生命保存」を〈目的〉とする・「擁護者・友人」の「[本人の・力の強さと] 融合された力の強さ」を「確保」せしめる・——「手段」としての——「力」(〈二重〉の「力」)なのである。

イ) 「富」は、こうして、i) 上記のとおり、「手段としての力」であるとはいえ、

ii) しかし、その〈根源目的〉が、「富」の〈所持者〉の「生命保存」・「生命の安全」にある以上、

iii) DHの論述について言われたのとひとしく、やはり、〈所持者〉に、「立

72) Lev・L, p. 68

ち所に」, また, 「手段としてではなくて直に」, 上記の「融合された・力の強さ」を, 「確保」せしめる「力」であるのでなければならない。——

g) 以上のように, ア) ホブズが, 「富もまた, …力である」, と規定するに至った経緯を, 連繫四著作にしたがって辿ってみる時,

イ) スミスが理解しているのとは〈異なり〉,

ウ) i) 「富」との〈関係〉における「力」とは, 「国政上の権力」を意味するものでは, 〈ない〉のであり,

ii) そして, また, 「確保」される「力」との〈関係〉における「富」も, それの〈所持者〉に, 「力」を, 〈間接に〉, かつ, 〈時の経過を前提して〉, 「手に入れさせる」性質のものでも, 〈ない〉ことが,

iii) 疑いを容れる余地なく, 明白になる。

h) いな, 知られたとおり, ア) 逆に,

i) ホブズにあっても, 「富」は〈所持者〉にたいし, 「力」を,

ii) —— スミスが, 自らの規定する「力」について言うのと《ひとしく》——, 「立ち所に」, かつ, 「手段としてではなくて直に」, 「確保」せしめるものであらざるをえないのであり,

iii) そして, 上記・ii) の根拠は, ——「富」が「確保」させる「力」の〈根源目的〉が, 「人間」の「生命保存」・「生命の安全」にある, —— というところにあるのである。

イ) このように, 「富」が「力」を「確保」させ・「手に入れさせる」《様態》にかんする・ホブズとスミスとの・所論上の・思わざる《合致》は, つぎの事情に基づくものである。

i) スミスの場合, 「商品」は, α) 「諸国民の富」の構成要素の一つとされるもの——すなわち, 「各国民」が「年間に消費する」(「使用価値財」に帰着する)「生活の必需品と便宜品」⁷³⁾——であるか,

73) 'Introduction and Plan of the Work' 「第1パラグラフ」, 「第4パラグラフ」(二箇所)。WoN., Vol. 1 p. 10

β) ないしは、《社会的分業》が行なわる以前と以後とを通じて〈個人〉の「富」の〈内容〉を形づくるものとされる「生活の必需品、便宜品、および、娯楽品」⁷⁴⁾であるか、

γ) ないしは、「租税」賦課の対象たる「消費財商品」をなす「必需品」ないし「奢侈品」⁷⁵⁾であるか、であるが、

ii) α) かかる「財貨」が、—— スミスの言うとおりに、「生産」・「確保」され、しかし、その〈生産者〉によって「消費」されずに、——「交換」される「商品」として、〈生産者〉すなわち〈所持者〉の「手に入れさせる」のは、

β) —— プラトーンにあってとひとしく、——《社会的分業》なる生産方法ゆえに、すべての〈生産者〉の各々に、《必然に》「必要」の〈不充足〉が生じてくるもの、

γ) とりもなおさず、《互いに他》の〈生産者〉が〈所持〉する「労働生産物」の・ある「量」(《根源》にあっては、《互いに他》の〈生産者〉が「支出」した(「商品となって現われる」・「二重刻印」を帯びている)「労苦と煩勞」・「労働」の・ある「量」、である。

δ) スミスは、かかる「労働生産物」が、「下層階級」にとっても「奢侈品」である場合(「タバコ」、「紅茶と砂糖」、「チョコレート」、「ウィスキー」、「強ビール」)、「高率課税」によってこれら「商品」の「価格」が「高騰」した時、それは「必ずしも、労働賃銀にあっての高騰を生じさせない」にも拘らず、「高価格」が、「奢侈禁止法」並みに作用して、かかる「奢侈品」の「使用」の「抑制」ないし「廃止」を惹起するのは、ひとり、「謹直にして・勤勉を心がける貧民」にたいしてのみであり、「万事なげやりで・心にしまりのない貧民」が、「子の養育」を犠牲にし、栄養の不足によって「子を死に至らしめ」

74) 'Book I, Chapter V' 「第1パラグラフ」。WoN., Vol. 1 p. 47

75) 'Book V, Chapter II, Part II, Article III, *Taxes upon consumable Commodities*' 「第2パラグラフ」。WoN., Vol. 2 p. 869

でもなお、これら「奢侈品」の「利用にふけりつづけることもありうる」⁷⁶⁾、としている。

ε) しかし、スミスの・こうした記述から学ばれるべきは、「貧民」の生活心情の高下でもなく、ないしは、プラトーンが、『国政』・「第二編」にあって、〈奢侈〉に耽溺する「社会」を指し、非難の意をこめ、「熱っぽく腫れ上がった・病めるポリリス」⁷⁷⁾と評している視点でもない。

δ) 洞察されるべきは、「奢侈品」にたいする「必要」が、栄養不足による・「子」の「死」への恐怖をも〈圧倒し去る〉力をもつ、という「人間の自然性質」の〈在りよう〉であり、とりもなおさず、「人間の自然性質」のうちにあって、「必要」(αἱ χρεῖαι [ハアイ・クフレエイアイ])とは、——プラトーンが示しているとおおり、——「私たち人間」の「存在すなわち生存のための」(τοῦ εἶναί τε καὶ ξὺν ἔνεκα [トゥーウ・エーエイナアイ・テエ・カアイ・ゼーエン・ヘエネエカ])⁷⁵⁾ものであり、「必要」とは、「生命保存」にとり《不可欠》・《不可分離》の羅針儀である、という・「必要」の意味である。

η) こうして、《互いに他》の〈生産者〉が所持する「労働生産物」(ないし「労苦と煩勞」・「労働」)の・ある「量」にたいする「必要」は、すべて、《根底》にあっては、「人間」の「生命保存」を《指向》しているものであらざるをえないのである。

iii) それゆえ、α) 「富」(「商品」)が、その〈所持者〉の「手に入れさせる」のは、

β) 〈所持者〉の「生命保存」を〈目的〉とするものとしての・《他》の〈生産者〉の「労働生産物」ないし「二重刻印」を帯びた「労苦と煩勞」・「労働」の・ある「量」であり、

76) loc. cit., 「第 6 パラグラフ」。WoN., Vol. 2 pp. 871—872

77) Πλάτων: “R.” (II), Stallbaum II., 372 · e ; Burnet, 372 · e, 8

γ) なればこそ、「富」（「商品」）は、〈所持者〉に、この・ある「量」を、「立ち所に」、かつ、「手段としてではなくて^(じか)直に」、^(じか)「手に入れさせる」のであり、より適切に言えば、「獲得」／「支配」せしめるのである。——

iv) ホブズとスミスとの・所論上の思[・]わ[・]ぎ[・]る《合致》は、上述の理由に基づくものである。

(次・IV. 15)－21) は、次号・以降)

52) 1) a) WoN. は、本稿・本・11), 前出・b), とくにウ), エ) に述べたように、「第一編」・「第五章」・「第1パラグラフ」にあっては、いまだ、「商品」の有する「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉する〈論理〉を《もたぬままに》, しかし、その〈論理〉の〈結論〉たるべきものを,

「それゆえ、どのような商品であれ、商品が、その商品を所持している当人にとってもっている[交換]価値[の・大きさ]…は、上記の[・多数にのぼる・ほかの人々の]労働の量のうち、当該の商品がその当人に、獲得することを得さしめ、あるいは、支配することを得さしめる量に、等しいのである。それゆえ、労働[の量]が、一切の商品の交換価値[の・大きさ]を測る・真実の尺度である」(The value of any commodity, therefore, to the person who possesses it, and who means not to use or consume it himself, but to exchange it for other commodities, is equal to the quantity of labour which it enables him to purchase or command. Labour, therefore, is the real measure of the exchangeable value of all commodities.), と告げ,

b) ついで、本稿・次・12) 以下に分析されるとおり、同・「第五章」・「第2パラグラフ」と「第7パラグラフ」との立論によって、上記の〈論理〉を示したのち、その〈結語〉を、「第2パラグラフ」の末尾に,

「労働[の量]が、一切の物[商品]の代価として支払われる・根源にある代償であつたし、根本となる獲得貨幣であつた。…すなわち、…富[商品]がもつ[交換]価値[の・大きさ]は、当の富が、それを所持し・しかも、その富を、なにらかの新たな生産物と交換する必要に迫られている人々に、獲得することを得さしめることができ、支配することを得さしめることができる・[ほかの人々の]労働の量と、精確に、等しいのである」(Labour was the first price, the original purchase-money that was paid for all things. It was not by gold or by silver, but by labour, that all the wealth of the world was originally purchased; and its value, to those who possess

it and who want to exchange it for some new productions, is precisely equal to the quantity of labour which it can enable them to purchase or command.), と述べ、

2) ついで、同じ〈論理〉にしたがって、

a) 一つには、本稿・後出・脚注・66) にその原文が掲げられている・「第3パラグラフ」の論述をおき、

b) そして、〈論理〉の〈結論〉として、

「ひとつひとつの物〔商品〕がもつ交換価値〔の・大きさ〕は、いつも必ず、その物〔商品〕が所持者の手に入れさせる…力の範囲」、——すなわち、当の「物〔商品〕」が「所持者に、獲得することを得さしめ、…支配することを得さしめる・ほかの人々の労働の量」——に、「精確に等しいものであらざるをえない」、(The power which that possession immediately and directly conveys to him, is the power of purchasing ; a certain command over all the labour, or over all the produce of labour which is then in the market. His fortune is greater or less, precisely in proportion to the extent of this power ; or to the quantity either of other men's labour, or, what is the same thing, of the produce of other men's labour, which it enables him to purchase or command. The exchangeable value of every thing must always be precisely equal to the extent of this power which it conveys to its owner.), と語り、

c) 二つには、「第7パラグラフ」の終りに、ひとしく、〈論理〉の〈結論〉——すなわち、

「それゆえ、ひとり労働〔の量〕だけが、それ自体の〔交換〕価値の点で、断じて変動しないのであるから、ひとり労働〔の量〕だけが、一切の商品の〔交換〕価値が、一切の時と一切の場所とにわたり、評量され比較されることができる・窮極かつ真実の規準なのである。労働〔の量〕こそが、一切の商品の・真実の代価である。…」(Labour alone, therefore, never varying in its own value, is alone the ultimate and real standard by which the value of all commodities can at all times and places be estimated and compared. It is their real price ; money is their nominal price only.), を告げるのである。

3) ところで、a) 上掲の諸〈結論〉にあって、「労働の量」が、「一切の商品」の有する「交換価値」の「大きさ」を〈測定〉する「真実の尺度」とされる（「第1パラグラフ」）のは、

b) これらの〈結論〉が基づく〈論理〉の中核にある概念が、——(本稿・12), 以

下に見るとおり), 「交換」されるべき・最少限・二個の・種類の相異なる「商品」の・それぞれの「生産」にさいして「支出」される・《無態様》の「労苦と煩勞」の「量」の「同等」／「平等」(すなわち, 「価値形成基体」としての・《等質》の「労働」の「量」の「同等」／「平等」) —— であることに, よるのである。

c) だが, しかりである以上, かかる・《等質》の「労働」の「量」とは, 当然, 《等質》のものたる「時間」を「尺度」として「支出」が〈測定〉された・「労働」の「量」でなくてはならず,

d) そして, 「労働」の「量」の「同等」／「平等」もまた, 各々の「労働」の「支出」の「時間」の「同等」／「平等」を「尺度」として, 〈確定〉されるほかは, ない。

e) しかも, (前掲・「第2」, 「第3」パラグラフに見られるとおり,) 「商品」の有する「交換価値」の「大きさ」と, 「労働の量」との・「精確」な「同等」／「平等」が明言されていることは, 上記の機能を果たす・「時間」という「尺度」そのものが, やはり「精確」であることを, 意味するものに, ほかならないのである。

4) ところが, 上掲・「第3パラグラフ」につづく「第4パラグラフ」は, 一見, 前記の〈論理〉に立つ諸〈結論〉に《矛盾》するかのような・下掲の論述で, 始まっている。

[1.] But though labour be the real measure of the exchangeable value of all commodities, it is not that by which their value is commonly estimated. [2.] It is often difficult to ascertain the proportion between two different quantities of labour. [3.] The time^{*)} spent^{**)} in two different sorts of work will not always alone determine this proportion. [4.] The different degrees of hardship endured, and of ingenuity exercised, must likewise be taken into account. There may be more labour in an hour's hard work than in two hours easy business ; or in an hour's application to a trade which it cost ten years labour to learn, than in a month's industry at an ordinary and obvious employment. [5.] But it is not easy to find any accurate measure either of hardship or ingenuity. In exchanging indeed the different productions of different sorts of labour for one another, some allowance is commonly made for both. It is adjusted, however, not by any accurate measure, but by the higgling and bargaining of the market, according to that sort of rough equality which, though not exact, is sufficient for carrying on the business of common life.

*) 'time' の語は, 「古典ラテン語」・'tempus' ([テムプゥス]) に由来し,

‘tempus’ は、「古代ギリシャ語」・「動詞」・‘τέμνειν’([テムネイン]。「刻む」, 「区切る」), ないし, ‘τείνειν’([テイネイン]。「拡げる」, 「払がる」) に, 発する, とされるのであるから, ‘time’ の原義は, 「時の経過の間」である。

**) ‘spent’ > ‘spend’ は, 「古典ラテン語」の「動詞」・‘expēdere’([エクスぺンデレ]。「拮抗させて秤量する」, 「秤にかける」; 「支払う」; 「支出する」) に源をもつ語であるから, ここでは, 「費す」よりは, 「古代ギリシャ語」の(プラトーンも用いた ‘ἀναλίσκειν’([アナアーリスケイン]) と同義の・「支出する」と解すべきである。

すなわち, 「第4パラグラフ」は, a) まず, 「[1.] しかしながら, 労働 [の量] が, 一切の商品の交換価値 [の・大きさ] の・真実の尺度であるとはいうものの, 一切の商品の [交換] 価値 [の・大きさ] が, 日常, 評量されるのは, 労働 [の量] によってでは, ない」, とし,

b) 詳言すれば, 「… , 日常, 評量されるのは」, ——(cf. 本・脚注・前出・3), b)) 「交換」されるべき「商品」・それぞれの「生産」にさいして「支出」された・「労働」の「量」の「平等」を形づくる両項たる ——「労働」の「量」 「によってでは, ない」, と〈否定〉するのであって,

c) そして, かく〈否定〉することの〈根拠〉を, 当然のことながら, ——上記の・「平等」を形づくるところの

「[2.] 労働の・二つの・相異なる量の間の割合 [が, 平等をなすに至るか, 否か] を確かめることは, まず難かしい」, ——というところにおき, (括弧内・補完は, 引用者による)

5) さらに, 「確かめる」のが〈困難〉であることの〈根拠〉として,

a) (本・脚注・前出・3), c), d) のとおり), 《等質》の「労働」の「量」を〈測定〉する「尺度」は, 当の「労働」が「支出」される・《等質》なるものとしての「時の経過の間」(「時間」) 以外にありえないとしつつも, しかし,

b) 「[3.] 作業 [／労働] の・二つの・相異なる種類に支出された時間は, 必ずしも, それだけで, 上記の割合を決定してくれるものではない」ことを挙げ, (括弧内・補完は, 引用者による)

c) すなわち, 「労働」の「量」の「同等」／「平等」は, 「時間」なる「尺度」による〈測定〉を以てしては, 〈決定されえない〉, とするのであり,

6) そして, 〈決定されえない〉ことの〈根拠〉を, 重ねて,

a) 「[4.] 「労働」には, 「難易・軽^(じゅう)重」の「度合」の「相違」があり, (「一時

間の・激しい作業」の中には、「二時間の・楽な業務」の中にある「より以上の・多量の労働」が、「ありうる」),

b) また、「知力」の「度合」の「相違」があるのであって、「(習得に十年の歳月の支出を要した仕事に一時間専念すること)」の中には、「世間一般の・誰にもできる職務に一ヵ月精励すること」の中にある「より以上の・多量の労働」が、「ありうる」),

c) したがって、《等質》な「労働」が「支出」される「量」を〈測定〉する「尺度」たる・《等質》のものとしての「時間」は、

d) 上掲のように、「難易・軽重」と「知力」との各「度合」の「相違」を免れない・すなわち《異質》な「労働」の「量」を〈測定〉する「尺度」たるに、

e) 〈足りない〉のである、という意味において、

f) 「[5.]」にも拘らず、[労働に密着している] 難易・軽重と知力との両者について、精密な尺度[としての・精密な時間]を見つけるのは、並大抵のことでは、ない、というところに、おくのである。(括弧内・補完は、引用者による)

7) こののち、論述は、前掲・[1.] の・「日常、評量されるのは、…」に、戻り、以下のようにして、「第4パラグラフ」は閉ぢられる。

「[6.] 確かに、相異なる種類の労働による・相異なる生産物を互いに交換するさいには、日常、双方の労働[の量]にたいして、しかるべき考慮が払われるものである。とはいえ、その考慮の大小は、精密な尺度[としての精密な時間]によって左右されるものでは、決してなく、大まかな平等にしたがう・市場での値引き駆引きによって左右されるのである。しかし、この種の・大まかな平等は、厳密ではないものの、日常生活の業務を遂行する上には、充分なのである」⁶⁾。——(括弧内・補完は、引用者による)

8) 上掲の論述を分析すれば。

a) 「日常」, 「市場」にあって「商品」が「交換」される局面で、「商品」の「交換価値」の「大きさ」(「価格」)の〈取り決め〉が行われる場合においても、

b) 「第五章」・「第2パラグラフ」に、前記の〈論理〉に基づいて、「鑄貨」ないし「財貨」(なる「商品」と、「物」(なる「商品」との「交換」にかかわり、

「…[なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨は、ある量の労働にたいする支配力を含んでいるのであって、私たちは、そうした・ある量の労働にたいする支配力を含んでいる[・なにらかの量の] 鑄貨ないし財貨を、その時に、それと等量[の労働]にたいする支配力を含んでいる、と考えられる[・ある量の] 物・[商品]と、交換するのである」、と述べられているとおり、(括弧内・補完と傍点とは、引用者による)

c) 「相異なる」・「双方」の「商品」の各々が「含んでいる」「等量 [の労働]」にたいする「支配力」の《根拠》として、当該・「双方」の「商品」の各々に〈含まれている〉・《等質》の「労働」(本・脚注・前記・3), b) の「労苦と煩勞」の「量」の「同等」／「等量」を,

d) 「交換」当事者が〈無視〉し・すなわち「考慮」の〈外におく〉ことは,

e) 言うまでもなく, 「商品」の「交換」それ自体を〈不可能〉ならしめるものであるから,

9) a) 「商品」の「交換価値」の「大きさ」の〈取り決め〉が行われるにあたっては,

b) 「交換」される・「相異なる種類」の「商品」に〈含まれている〉・各々の「労働」の「量」にたいして, 「しかるべき考慮」が「払われる」ことが, 〈不可欠〉であり,

c) そして, 「しかるべき」とは, —— 上記の・「労働」の「量」の「平等」(「同等」・「等量」) に「したがう」—— の意である以外に, ない。

10) しかしながら, a) 「労働」の「量」の「平等」が, もし, 「厳密」な「平等」を意味するものとすれば,

b) 「厳密」な「平等」とは, 「労働」が「支出」される・「精密」な「時間」(なる「精密な尺度」) によってのみ, 〈得られる〉ものであり,

c) しかるに, 既に, 本・脚注・前出・6) までに見られたとおり, 「精密」な「時間」は, 「支出」された「労働」の「量」を〈測定〉する「精密な尺度」〈たりえない〉のであったから,

d) 「労働」の「量」の「平等」が, 「厳密」な「平等」であることは, 〈ありえない〉のである。

11) a) さらに, また, 「商品」に〈含まれている〉「労働」の「量」の「平等」について「商品・交換」当事者が行うのは,

b) 前掲・「第2パラグラフ」に, 「等量 [の労働] にたいする支配力を含んでいる, と考えられる [ある量の] 物 [商品] と, 交換するのである」, と言われているとおり, 〈主観的推量〉〈以外〉には, 〈ありえない〉のであって,

b) このことは, 「商品・交換」の当事者は, 「交換」にあたり, 殆ど〈必然に〉, 「値引き駆け引き」に走ることを, 意味するものであるから,

c) この理由によってもまた, 前述の・「労働」の「量」の「平等」にたいして「払われる」「考慮」が, 「精密」な「時間」という「精密な尺度」に「したがう」ことは,

〈ありえない〉ことになる。

12) とはいえ、a) 上記の「考慮」が「払われる」ことなくしては、「商品」の「交換」は、〈不可能〉であるのであったから、

b) 「考慮」の〈内容〉は、「労働」の「量」の——「厳密」な「平等」を〈除いて〉残る「平等」、

c) すなわち、「大まかな平等」であらざるをえないことに、なる。

13) こうして、a) 上記の「考慮」は、

b) 「商品」に〈含まれている〉・「労働」の「量」の・「大まかな平等」に「したがう」ところの・

c) 「交換」当事者の「値引き駆け引き」に「よって」、

d) それの「大小」が「左右される」のであり、

e) この・「考慮」の「大小」が、「日常」、「市場」で「交換」されるさいの「商品」の「交換価値」の「大きさ」（「価格」）の〈取り決め〉となって、現われるのである。

f) 本・脚注・前掲・7) の論述の趣意は、分析すれば、以上のところに、ある。

14) ところで、しかし。a) 「相異なる種類」の「商品」に〈含まれている〉・「労働」の「量」の「大まかな平等」とは、

b) ほかでもなく、かかる・「労働」の「量」を〈測定〉する「尺度」たる「時間」の（とりもなおさず、かかる「労働」が「支出」される「時間」の）・「大まかな」〈推定〉を「尺度」とする「平等」のことなのであって、

c) それゆえ、「時間」は、「労働」の「量」の「平等」の——「精密な尺度」では、〈ありえない〉にしても、——なお、「大まかな」「尺度」ではありつつけるのである。

15) してみると、「第4パラグラフ」の論述が、

a) 精密な尺度〔としての・精密な時間〕を見つけるのは、並大抵のことでは、ない。

「精密な尺度〔としての時間〕によって左右されるものでは、決してなく、…」。

「厳密ではないものの、…」、——という表現をとっているのは、

b) 「大まかな」「尺度」としての「時間」ならば、それを「見つける」ことは、〈可能である〉、の意であり、

また、かかる「大まかな」「尺度」たる「時間」に基づく（「労働」の「量」の）「厳密」〈ならざる〉・「大まかな平等」に「したがう」〈限り〉であるならば、

「労働」の「量」にたいして「払われる」「考慮」の「大小」が、こうした「大まか

な平等」「にしたがう」「値引き駆引き」「によって」、「左右される」ことも、「商品」の「交換」を〈可能ならしめる〉、——ということを含意し、

そして、上記・二つの・〈可能〉を支えているのは、「大まか」ではあれ「時間」と、「大まかな」「時間」を「尺度」とする・「労働」「量」の「大まかな平等」と、であるのであるから、

かく「左右される」「考慮」に応じて、「商品」の「交換価値」の「大きさ」が〈取り決め〉られるにしても、

そのことは、「第4パラグラフ」以外の諸パラグラフを一貫する・（「商品」の有する「交換価値」の「大きさ」を〈規定〉する）〈論理〉を、

なんら、〈そこなう〉ものでは、〈ない〉、ということ、意味しているのである。

c) したがって、「この種の・大まかな平等は、厳密ではないものの」、

「第4パラグラフ」の末尾に述べられているように、「日常生活の業務を遂行する上には、充分なのである」に〈とどまらず〉、

また、上記の〈論理〉を、〈逸脱しない〉ものでも、ある、と言わなければならない。

16) こうして、a) 「第4パラグラフ」の論述は、他の諸パラグラフのそれに、《矛盾》するように見えるに、すぎないのであり、

b) そして、そのように見えるのは、「第4パラグラフ」冒頭の・前掲・[1.]の立言が、《不適切》であったことに、よるものであって、

c) 換言すれば、「[1.] 労働 [の量] が、一切の商品の交換価値 [の・大きさ] の・真実の尺度である」とはいうものの、…」につづく文言は、

〈相異なる商品に含まれる・各々の労働の量が、日常、精密な時間を尺度として評量されることは、不可能である〉、であるべきであったのである。

d) 事実、つづく [2.] 以下の立論は、かかる論旨に立っているのである。

17) a) 「時間」は、〈論理〉においては、いかに「精確」・「精密」なるものとして〈語られ〉ようとも、

b) 「日常生活」にあっては、殆どいつも、「おまかな」もの・〈推定〉されるほかないものであり、

c) しかし、そのことは、〈論理〉の〈有効性〉を、なにら、〈妨げる〉ものでは、〈ない〉のである。——